



令和 4 年度
琉球競馬ンマハラシー
実施報告書

令和 5 年 3 月
公益財団法人沖縄こどもの国

目次

はじめに

第1章 沖縄こどもの国の在来家畜の取組み

コラム：在来家畜と品種

第2章 琉球競馬ンマハラシーの復活までの道

コラム：琉球競馬「ンマハラシー」と「ンマスーブ」

コラム：沖縄の馬場跡

第3章 宮古島における在来馬の聞き取り調査

第4章 伊是名島における琉球競馬の聞き取り調査

第5章 沖縄島における琉球競馬の聞き取り調査

第6章 琉球競馬ンマハラシーオンラインシンポジウム開催

第7章 第18回琉球競馬ンマハラシー競技大会開催

第8章 在来馬の活用に関する課題と展望

コラム：在来馬の保存と展望

執筆者紹介

謝辞

付録（第18回琉球競馬ンマハラシーパンフレット）

はじめに

金尾 由恵

琉球弧は世界中でもここにしかない特異的な自然を有しており、多くの固有種が生息するなど、日本の中でも有数の生物多様性が高い地域であることが知られている。そうした豊かな自然環境を背景に、そこで暮らす人々もまた琉球弧の自然の影響を受け、日本本土とは異なる多様な文化を育んできた。そうした文化の一つに在来家畜と呼ばれる、地域固有の家畜の存在が挙げられる。沖縄こどもの国では、与那国馬・島ヤギ等、その地域で残されてきた在来家畜種を地域の文化資源と捉え、その保存・継承に力をいれてきた。そして、これらの在来家畜の飼育・展示を通じた家畜の保存のみならず、在来家畜に関わる文化や歴史といった人との関わりについても重要な文化資源と考え、積極的にその普及・啓発に取り組んでいる。

在来家畜はその地域にくらす人々が長い歴史の中で地域ごとに飼育、累代繁殖させてきた生物であり、その身体的特徴はそれぞれの地域における先人たちが家畜に求めたニーズを反映していると考えられている。そのため在来家畜はその存在そのものが土地の文化を体現しているとも解釈でき、島嶼域である琉球弧はそうした家畜が多い地域である。しかしながら、人々の生活様式が急速に変化し、家畜が身近な存在ではなくなりつつある現在、こうした家畜が急速に姿を消しつつある。在来家畜の保全には野生動物とは異なる視点でのアプローチが必要となり、家畜そのものの品種の系統維持だけでなく、家畜を取り巻く行事などの周辺文化の継承や道具類などの再現などもあわせて保全していく必要がある。そのためにもエコツーリズムや観光的付加価値の創出といった従来の使役家畜としての役割に代わる利活用法を創造することが喫緊の課題となっている。そうした取り組みの一つに位置づけられるのが本報告書の主題である「琉球競馬ンマハラシー」である。

琉球王国では、競馬は約 300 年以上前からおこなわれており、美を競う競馬も約 150 年にわたり地域で開催され続けてきた。現代の競馬のような馬の速さや強さを競うだけではなく、走りの美しさや人馬の衣装を含めた優雅さを競うという面で世界に類を見ない、大変貴重な伝統文化である。戦前、沖縄県内にはそうした競馬を行うための馬場が 200 近く存在し、各地域において年中行事の際、競馬が開催されていた。競馬の当日には地域内外から大勢の観客が訪れ、出店が立ち並び、馬場は大歓声に包まれていたといわれているほど当時の人々の中に息づいていたようである。しかしながら先の大戦以降、琉球の競馬は開催されることなく、長らく途絶えてしまっていた。そのような中、本園では沖縄県馬術連盟や地域の団体と連携することで、2013 年に約 70 年ぶりに琉球競馬ンマハラシーを本園のイベントとして復活させ、以降コロナ禍で中断されるまで毎年継続して開催してきた。

本事業では、2013 年のイベントとしての復活から 10 年目となる 2023 年に沖縄の貴重な伝統文化である「琉球競馬ンマハラシー」の文化的な価値の発掘と、その知見を活かした競技大会を行い、その認知度を高め、地域住民の伝統文化に対する意識の高揚を図ることを目的とした。また、当時の琉球競馬や在来家畜にまつわる人々の暮らしを知る情報収集を行うことを目的に聞き取り調査も行った。

本報告書では、第 18 回琉球競馬ンマハラシー、琉球競馬オンラインシンポジウム、伊是名島、宮古島、沖縄島での聞き取り調査に関わる内容を取り上げた。聞き取り調査の結果はできるだけ、多くの方々に見ていただきたいと考え、話者の方々のお話しをできる限りそのまま掲載している。沖縄の消えゆく文化を保存する学術研究の面だけではなく、琉球弧独自の素晴らしい文化があったことを伝え、地域の人々の誇りとなるよう普及・啓発の一助となれば幸いである。

末尾になりましたが、本報告書を執筆いただいた調査員である佐藤寛之氏（沖縄生物倶楽部）をはじめ、

今野直人氏（全国乗馬倶楽部振興協会）、梅崎晴光氏（スポーツニッポン新聞社）、喜瀬涼子氏（沖縄観光コンベンションビューロー）、高田勝氏（有限会社今帰仁アグー代表）、渡久山環氏（沖縄市観光物産振興協会）、中川美和子氏（ヨナグニウマ保護活用協会）、花城薫氏（沖縄県馬術連盟）には大会運営に関するご助言をいただいた。また、宮古島市教育委員会、長濱幸男氏（宮古島市史編さん委員会）、荷川取牧場、伊是名村教育委員会、地域の方々に聞き取り調査にご協力いただいた。心より感謝を申し上げます。

本報告書は、文化庁の令和4年度 Innovate MUSEUM 事業の補助を得て実施した「第18回琉球競馬ンマハラシー事業」の成果を収録したものである。

令和5年3月

第1章 沖縄こどもの国の在来家畜の取組み

島田 晴加

◆在来家畜とは

家畜とは、人類が野生動物の一部を飼育し、使役や食料、愛玩など、人間の生活に有用な価値をもたらす、その生殖を人が管理している動物である。一般的に家畜というと、肉や乳、卵を得るために飼育されている経済品種を指すことが多いが、食用となる経済品種だけでなく、医学や薬学を支える動物、農耕の手助けをする農用動物、生活を共にする愛玩(伴侶)動物も、生殖を人が管理しているという点で家畜に含まれる。現在一般に認識されている家畜は経済品種と呼ばれ、19世紀の産業革命以降に産乳、産肉、といった畜産物の能力向上を目的に選抜と育種を繰り返して作られた動物である。近年の人間の世界規模での経済活動の高まりとともに元来ばらつきのあった畜産品にも「均質な製品」としての需要が求められるようになり、ホルスタイン種や白色レグホン種といった産肉性、産乳性に特化した同一の品種が世界中で飼育されるようになってきている。

一方、在来家畜とは、品種という概念が生まれる前からその地域の人々の生活の中にいた家畜たちのことで、気候風土や餌の多少、求められる役割など、それぞれの地域でのニーズ反映した家畜群あり、上記の品種と呼ばれる家畜とは異なる特徴をもつことが知られている(在来家畜研究会, 2009)。在来家畜は、例えば、馬や牛のように、田畑を耕し、荷物の運搬をするなどの使役や、豚や鶏などのように、食用のほか祭事での供物用としても利用されるものなど、そこで暮らす人間の日々の生活や祭事などの風習を手助けする存在として各地域で独自の文化として発展していった。そして、その過程において色や形、大きさ、性格、能力の選抜が行われることで、地域独自の家畜が成立していった。現在生き残っている在来家畜の特徴の多くは各地域での数限りない選抜の結果であり、そのことはすなわち、それぞれの地域の生活や風習の体現している家畜群とみなすことができ、その地域の文化を知る上で重要な存在といえよう。

琉球列島は、日本の南西、九州と台湾の間に位置する200近い島々で構成された島嶼域である。島という環境は陸上生物にとって交流を妨げる大きな要素として機能することが知られているが、人間の交流もまた陸続きの場所に比して制限を受けることとなる。その結果、琉球列島の島々では島ごとに生活様式や風習などの違いがあることが珍しくなく、多様な文化が島の歴史とともに良好に保存されている地域であり、世界でも珍しい環境であるといえる。そうした事情を反映してか、琉球列島は、日本の中でも在来家畜が多い地域として知られている。そして家畜そのものだけでなくその利用法や習慣といった家畜にまつわる文化もまた、比較的残っている地域といえる。

しかしながら近年、機械の普及や経済性を重視する時代の流れに逆らうことができず、在来家畜はその地域の文化と共に急速に失われつつある。そこで当園では、沖縄を含む琉球列島の在来家畜を地域の歴史的資源ととらえ、その保全に力を入れている。在来家畜の保全は、野生動物の保全とは異なり、地域文化を守るという意味も含まれる。そのため、在来家畜とその文化を保全するためには、沖縄に家畜が導入された歴史や活用方法も知る必要がある。

◆沖縄における在来家畜の利用

沖縄の在来家畜は供物や役畜、趣味、行事食での利活用を目的に飼養されてきた。琉球列島への家畜の導入時期は家畜種により異なり、豚や馬、牛、山羊、鶏は、琉球王国時代に広く海外貿易を通して交流を

深めた時代に持ち込まれ、犬と鶏(前記とは別品種)は、それ以前に導入されたと言われている(高田, 2017)。持ち込まれた家畜たちは、沖縄の気候や各島々の文化と風習の影響を受けながら、その地域独自の家畜として人々に残されてきた。そのため、琉球列島には多様な在来家畜が生まれてきた。

琉球列島における在来家畜と人々の関わりとして、“闘牛(ウシオーラセー)”や“闘山羊(ヒージャーオーラセー)”、“闘鶏(タウチーオーラセー)”といった、牛や山羊、鶏同士を競わせる競技があり、現在でも沖縄県民に人気がある。他にも、歩様の美しさを競う“琉球競馬シマハラシー”や沖縄地鶏であるチャーンの鳴き声や容姿の美しさを競う“鶏鳴大会”など、他県では類を見ない競技も残っている。

また、沖縄では動物供犠の文化も残っており、その一つに“シマクサラシ”がある。これは、災厄が村へ侵入するのを防止する目的で行われる村落規模の儀礼である。シマクサラシは、豚や牛などの動物の骨を挟んだ左縄を村の入り口に張り渡らされて行われ、地域によって動物種や行われる月日に違いがある(宮平, 2016)。

食文化に関しても、沖縄独自の文化を作り上げている。沖縄の料理は“クスイムン(薬もの)”であるといわれる。これは、漢方的な発想ではなく、食材の栄養素を最大限に活用し、滋養のある汁物にして食べるという考えである。そのため、限られた食材を最大限活用するために、“シンジ(煎じ)”という調理法が多く使われる(外間, 2010)。また、沖縄では、山羊の飼育頭数が多く、山羊肉料理も多く見られる。祝いの席や慰労会などの行事食で山羊肉が食され、現在でも多くの山羊肉料理店が見られる。さらに、沖縄では豚肉を中心とした料理が多い。これは、琉球王国時代に中国からの使節団である冊封使をもてなす際に豚肉が使用されたことや17世紀に豚のエサとなる甘藷が持ち込まれた事で、沖縄の養豚業が大きく発展したためである(外間, 2010)。しかし、当時、豚は正月や清明祭などの供儀や祭祀の儀礼に供物として使われており、庶民にとっては高価な食材であった。そのため、“鳴き声以外は全て食べる”という思想が生まれた。

豚に関して、日本本土で見ることができない飼養文化の一つが“ウーフル(豚便所)”である。これは、豚小屋と便所が一体化した建物で、人糞を豚に食べさせていた。この文化は、中国や東アジア、ポリネシア原住民に多く見られた文化で、中国から入ってきた文化と考えられている(平川, 2021)。

以上のように、娯楽や食文化以外でも沖縄の人々の生活には家畜が密接にかかわり、独自の文化を築いていったことがわかる。

◆琉球弧の在来馬

日本に馬が渡来した時期や経路に関しては、いくつかの説がある。考古学的視点でみると、3世紀ごろの日本の様子を記している魏志倭人伝の中で、馬が書かれていない点と4世紀末の古墳から鞍やハミ、鎧を装着した埴輪馬が多く出土している点から、日本に大陸から馬が持ち込まれたのは4世紀以降とされている(近藤, 2021)。

日本には北海道和種馬、木曽馬、対州馬、野間馬、御崎馬、トカラ馬、宮古馬、与那国馬の8品種の在来馬が存在し、それら全てがモンゴル地域の在来馬集団を祖先としている(在来家畜研究会編, 2009)。朝鮮半島を経由して日本へ渡来した後、各地へと広がり、各地域で繁殖・飼養が進んだ結果、現在の8品種に分かれていった。そのうち、琉球列島にはトカラ馬、宮古馬、与那国馬の3品種が現存している。琉球列島へ馬が入ってきた経路に関しては、九州から琉球へ渡ったとする説が有力であるが、詳細に関しては不明瞭なままである。

馬が沖縄島へ持ち込まれたのは、11世紀後半から12世紀前半であると考えられ、宮古島への導入は14世紀以降(長濱, 2012)、与那国島には16世紀以降とされる(田島, 2015)。当時、宮古島と与那国島は琉球

王国の支配下であったため、琉球王府のある沖縄本島を経由して各島に導入されたと考えられる(新城・嵩原, 1992)。

トカラ馬、宮古馬、与那国馬は、各島で飼養されてきたことで3品種へと分かれているが、馬の特徴は似ている部分が多い。3品種とも、平均体高は108—122 cmと小型である。性質は温順であり、粗食に耐え、耐久力があるという特徴がある。また、体高のわりに負荷力があることから、各島で農耕や駄載、サトウキビの搾汁などで用いられていた。どの島においても馬は家族の一員であり、生活に欠かせない存在として大切に飼育されてきた。現在、トカラ馬は鹿児島県指定の天然記念物、宮古馬は沖縄県指定の天然記念物、与那国馬は与那国町の天然記念物に指定されている。

トカラ馬は、トカラ列島の南端に位置する宝島で発見された馬である。1897年(明治30年)に喜界島で生産されていた喜界馬の十数頭が宝島へ導入され(企画観光課, 2019)、その子孫にトカラ馬と名がつけられた。トカラ馬は宝島に導入されて以降、外部の馬と交流がない上、島外にでることも無かったため、在来馬としての純粋性が高いまま維持されてきた集団として、遺伝資源的・学術的に重要視されている(岡本, 2021)。

琉球王国時代、14世紀後半から始まった中国(明)との貿易では、馬と硫黄が進貢されていた。当時、琉球産馬は小柄でありながらも頑丈で従順な性格であることに加え、蹄が硬く、悪路であっても蹄が傷みにくいことから多くの馬が求められており、琉球王国は馬の生産に力を入れていた。その中で、宮古島は重要な馬産地であった。17世紀以降になると、宮古島産馬は江戸への献上馬や御用馬を調達する目的で、宮古島へ役人の派遣や献上馬を選定する馬場の設置が行われ、競馬などの馬事文化も継承された(長濱, 2012)。1920年頃から昭和初期になると、県内では競馬が盛んに行われており、活躍する馬は宮古馬が多かった。一方で、農耕や駄載で利用する馬は宮古雑種馬と喜界島雑種馬であったとされる(長濱, 2012)。

宮古島が馬産地として発展していた一方で、与那国島には馬場や競馬といった琉球の馬事文化が継承していない。この理由としては、与那国島に馬が持ち込まれたのが16世紀から18世紀と遅かったことと、島民の人口が少ない上に琉球王国から遠い場所であったため統治しにくかったと考えられる(田島, 2015)。また、19世紀以降になると、与那国島の人々は馬を牛とともに放牧しており、馬を駄載や移動手段として用いていたことが記録されている(田島, 2015)。現在、与那国馬は役畜としての役割からは後退したが、与那国島の北牧場で牛と共に放牧されている。

日本の馬飼養が大きく変化したのは、日清・日露戦争後のことである。この戦争以降、陸軍は軍馬の生産により一層の力を注ぐようになり、1906年から1935年に第一次馬政計画が実施された。明治初期の日本馬は在来馬のような体格の小さい馬が多くを占めていたが、軍馬としては質を欠いていた。そのため、日本馬の大型化が計画され、欧米血統の導入による改良が行われた。その結果、日本はアジアで最も優れた軍馬を保有するに至るが、在来馬血統はほぼ一掃された(大瀧, 2016)。

このような国の政策は、琉球列島の在来馬にも影響を与えた。トカラ馬の起源とされる喜界島は馬産地であったため、外国品種との交雑が進められていった(宝島へ渡った十数頭は純粋な喜界馬とされる)。それに加えて、1953年の本土復帰後に農業機械や自動車が普及したことで、1990年に飼育されていた喜界馬(純粋でない)が死亡したのを最後に喜界島から姿を消した(岡本, 2021)。現在、トカラ馬は主に中之島、開聞山麓自然公園および入来牧場で飼育されており、令和3年度の飼育頭数(日本馬事協会)は79頭となっている。

沖縄島では、1901年に施行された馬匹去勢法により、1933年になると在来馬の雄馬はほぼすべて去勢されていた。しかし、宮古島では、馬匹去勢法が一時適用されたものの、島民の抵抗を受けて適用除外区域となったことから、飼育されていた馬のほとんどは在来馬であったとされる(長濱, 2012)。また、与那国

島に関しても、国策により日本各地の在来馬が減少していく中、沖縄本島から遠いこともあり、与那国島まで法的な力が及ばなかったようである(高須, 2021)。その結果として、与那国馬の純粋性は保たれ、明治以前から変わらない姿のまま、現在に至っている。外国品種との改良を逃れた宮古馬と与那国馬であっても、農業機械や自動車の普及には逆らうことができず、令和3年度調べでは(日本馬事協会)、宮古馬は49頭、与那国馬は117頭まで数を減らしている。

◆沖縄こどもの国での取り組み

在来家畜は各地域の風習や人々の生活を支えてきた家畜群であるが、生活様式の変化や農業機械の発達と普及により、その役割を失っていった。また、経済性が低いため、食用として利用するにも非効率的であることから、経済性の高い改良品種へと置き換わり、著しく数が減少している。現在では、愛好家や保存会により、細々と保存されている状態である。

在来家畜は、その地域固有の文化を体現している動物であるため、在来家畜の消滅はその地域の文化を失うことを意味する(在来家畜研究会編, 2009)。つまり、在来家畜の保全には、単に個体の遺伝資源(系統)を保存するだけでなく、農具の装着やその製作・使用する技術、地域の風習といった人の生活とのかかわりも含めた文化継承が必要となってくる。これは、野生生物との保全とは異なる点である。しかし、近年、各地域で過疎化・高齢化が進み、文化や技術の継承が困難な状態となっている。したがって、沖縄こどもの国では、在来家畜の飼育を行うとともに、その在来家畜が人とかかわってきた文化に興味・関心を抱き、後世に伝えるきっかけとなるよう、展示や教育プログラムにも力を入れている。

当園では、琉球列島に生息する生物を飼育展示している琉球弧エリア内に在来家畜コーナーを設け、口之島牛、与那国馬、琉球犬、大東犬、島ヒージャー(沖縄在来山羊)、島ウゥー(沖縄在来豚)、チャーン(沖縄在来鶏)の飼育展示を行っている。

園を訪れた方々が、在来家畜に興味関心を持つ入口的役割として、在来家畜のエサあげ体験や与那国馬の乗馬体験を行っている。これら日常的な取り組み以外にも、琉球列島の特異な自然やそれに育まれた知恵と技法を伝える沖縄魅力発見講座や在来家畜の飼育体験プログラムであるみらいスクール「家畜スクール」、地域独自の文化である琉球競馬ンマハラシーといった取り組みを実施してきた。

琉球競馬ンマハラシーの開催を機会に、当時、農作業で牛や馬を扱っていた方との人脈も広がり、牛や馬への駄載技術や荷鞍やサトウキビの搾汁に使用するサーター車の使用方法を教授していただいた。このような在来家畜と共に発展してきた技術は、当時の方の高齢化と農業機械の普及により必要とされなくなった結果、在来家畜の減少とともに技術の継承もほぼ途絶えてしまっている。当園では、各地域に残されてきた技術や文化を後世に伝えることが、在来家畜の保全を含めた文化と技術の継承につながると考えている。前述した取り組み以外にも、来園者や学校の教員、そして修学旅行などで訪れた団体向けに在来家畜にまつわるガイドを行っている。その中では、沖縄に日本本土とは異なる歴史と文化があること、沖縄の人々と在来家畜とのかかわりなどを紹介している。また、動画配信サイトも活用し、県内だけでなく、多くの方に周知する機会を設けている。

これまで、地域文化に関する情報は地元の博物館が資料を収集・保存、そして展示を行い、在来家畜は動物園が飼育展示するというように、各々で展示と情報発信を行ってきた。しかし、文化と技術の継承を含めて在来家畜を保全していくには、地元の博物館で収蔵されている農工具や衣装などの資料も必要となるため、動物園と博物館の連携は必須である。実際、当園の乗馬体験で使用している馬の鞍や琉球競馬ンマハラシーで着用している衣装は、地元の博物館の収蔵品を復元したものである。

さらに、在来家畜の保全には地域の家畜飼育農家との連携も必須である。さらに視野を広げると、在来

家畜が文化や歴史を伝える生きた教材として、学校等の教育機関と連携を進める必要もあると考えている。実際、「沖縄学」や「沖縄在来家畜から学ぶ沖縄の歴史と文化」と題して実施した教員免許状更新講習では、沖縄の歴史や文化に関する講話やサーター車を活用した黒糖作り体験を行った。講習後のアンケートでは、「社会科で沖縄の歴史や文化を紹介した」「学校に出前授業をしてくれたらうれしい」などの声があった。指導要領からも小学校の生活や総合学習、社会科などで在来家畜を活用できる見込みがあり、動物園を活用した学校教育につなげることができると考えている。さらに、県民だけでなく、沖縄を訪れた観光者向けの体験プログラムを提供することで、エコツーリズムとしての活用が成り立つと考える。

最後に、在来家畜は人と生活を共にしてきた動物であり、人とのかかわりなしでは保全していくことができない。そのため、動物園では、人の生活様式が変化したことで役割を失った在来家畜に、「沖縄の文化を伝えていく」という新たな役割を作り、家畜品種の保全だけにとどまらず、文化と技術を継承する場を創出することが求められている。

◆引用文献

- ・「アジアの在来家畜」 在来家畜研究会(編), 名古屋大学出版会, 2009
- ・「アジアのなかの琉球列島の在来家畜と人」 高田勝, ビオストーリー vol. 27 沖縄の在来家畜と人, 8-15, 誠文堂新光社 2017
- ・「琉球列島におけるシマクサラシ儀礼の民俗学的研究」 宮平盛晃, 2016
- ・「沖縄の食文化」 外間守善, 新星出版, 2010
- ・「沖縄フルマン茶羅」 平川宗隆, ボーダーインク, 2021
- ・「在来馬とはなにか」 近藤誠司, 日本の馬, 1-14, 東京大学出版会, 2021
- ・「在来馬の遺伝的背景」 戸崎晃明, 日本の馬, 15-34, 近藤誠司(編), 東京大学出版会, 2021
- ・「トカラ馬-孤高に生きる」 岡本新, 日本の馬, 105-117, 近藤誠司(編), 東京大学出版会, 2021
- ・「宮古馬-琉球王府を支えた馬」 長濱幸男, 日本の馬, 118-132, 近藤誠司(編), 東京大学出版会, 2021
- ・「与那国馬-最西端にいる馬と人」 高須正規, 日本の馬, 133-144, 近藤誠司(編), 東京大学出版会, 2021
- ・「宮古馬のルーツを探る」 長濱幸男, 宮古島市総合博物館紀要 16, 宮古島市総合博物館, 2012
- ・「与那国馬の起源 与那国島に馬がもたらされた時期および経路について」 田島和歌子, 愛国学園大学人間文化研究紀要 (17) 58-64, 2015
- ・「沖縄県在来畜養動物実態 緊急調査報告書」 新城明久・髙原健二, 沖縄県教育委員会, 1992
- ・「広報きかい No. 619」 企画観光課, 喜界町役場, 2019
- ・「帝国日本の軍馬政策と馬生産・利用・流通の近代化」 大瀧真俊, 日本獣医史学雑誌(53) 32-40, 2016
- ・「日本在来馬の飼養頭数の推移」 公益社団法人 日本馬事協会
<https://www.bajikyo.or.jp/pdf/shiyoutoususuii.pdf>

●コラム「在来家畜と品種」

佐藤 寛之

在来家畜とはその土地の環境と土着の住民のニーズに適した姿かたちや能力を有した家畜のことです。元来家畜とは、人類が野生動物を飼育、類代繁殖させることで急速に野生生物とは異なる形質を持つようになった生物です。類代繁殖させるのはそこに住む人間なのでですから気候などの自然環境に加え、その土地の人間が求める役割を持った個体に次の世代を産ませ、さらに次の世代を産ませる、ということを繰り返すことになります。足の速さや耐寒性、耐暑性、粗食に耐えるか、などなどそれぞれの地域で求められる能力や資質は当然違うわけですから世界各地で人類が家畜を飼育することでじつに様々な特徴を持った家畜が存在するようになりました。これが在来家畜と呼ばれる生き物になります。

しかしながら 19 世紀の産業革命以降、そうした在来家畜の持つ特徴を掛け合わせることで特定の能力（産乳性や産肉性）に特化した「品種」と呼ばれる家畜がつくられるようになりました。今日多くの人の「牛」のイメージに出てくるホルスタインやジャージーと呼ばれる牛はこうした過程で作られた品種です。人間の経済活動の爆発的な発展とともに農作物も規格にのっとった製品とみなされていく過程でそうした品種は需要を増し、国境を越え世界中に広がりました。その結果、特定の能力において効率が劣る多くの特徴を持ったそれぞれの地域特有の在来家畜と呼ばれる家畜たちは品種に置き換えられるようになりその多くが姿を消すことになりました。

第2章 琉球競馬ンマハラシーの復活への道

金尾 由恵・友利 和也

琉球競馬ンマハラシーは2013年に復活したが、簡単に復活したわけではない。比嘉源和氏が、長年をかけて沖縄こどもの国で在来馬を飼育する環境を整え、琉球競馬に関する聞き取り調査を行い、様々な方々にご協力いただいて復活させることができたイベントである。その復活の立役者である比嘉氏から、琉球競馬ンマハラシーを復活させるまでに至った内容をライブ配信内で聞き取りを行った。聞き取った配信は、当園のオンラインサポーター「ゆんたくコミュニティ」のSNSグループ内で2022年3月12日に配信した「琉球競馬ンマハラシー復活までの道のり」である。第2章では、その配信を文字に起こして記録した。

以下に、ライブ配信での話者の名前を記す。

翁長：翁長 朝（沖縄こどもの国 動物みらい課課長）

比嘉：比嘉 源和（沖縄こどもの国 元園長、現相談役）

木下：木下 あや（あやぼん）（沖縄こどもの国 教育普及担当）

金尾：金尾 由恵（沖縄こどもの国 広報兼教育普及担当）

琉球競馬ンマハラシー復活までの道のり

翁長 それでは「ゆんたくコミュニティライブ」をご覧の皆様、こんにちは。本日もご視聴いただきまして、誠にありがとうございます。本日はですね。事前にお知らせさせていただいたとおり、琉球競馬ンマハラシー復活までの道のりと題してお届けしたいと思います。そして、本日は私、こどもの国翁長と、こちらにいらっしゃいます、さつき数えたんですけど、こどもの国勤務歴47年目比嘉源和相談役と一緒にですね。ちょっと語っていききたいと思います。そして、またスペシャルゲストとして紅一点経営みらい課の木下さん「あやぼん」です。実はあやぼんはですね、このンマハラシーの開催に当たって、運命的な出会いもありますのでその辺もちょっとおしゃべりしながらやっていけたらと思います。

そして、ご存じない方もいらっしゃると思いますので、ンマハラシーのことを簡単にお話しします。琉球王国時代から、戦前まで約300年間続いたとされる沖縄の伝統文化で、最大の特徴が、走る速さだけではなく、人と馬とが一体になって走る美しさを競った、世界にも類を見ない競技だったんですね。戦争の足跡が近づいてきた1943年は首里の「平良マージ」で開かれた大会を最後に、長い間途絶えていたんですけども、この比嘉相談役を中心にたくさん関係者のお力添えをいただきながら、2013年、実に70年ぶりにここ沖縄こどもの国で復活ということになりました。今日はその復活までの足取りというか軌跡と、また今後の展望なども含めて比嘉相談役とあやぼんと一緒におしゃべりをしていきます。それではよろしくお願いします。

木下 お願いします。

比嘉 お願いします。

翁長 事前にコミュニティの皆さんからも質問もいただいております。「比嘉相談役がシマハラシーを復活させようと思ったきっかけが知りたいですということと、シマハラシーを 70 年ぶりに復活させるに当たってどういった文献を参考にされたのでしょうか。戦前のシマハラシーに関する書物や映像が残っていたのか、あるいは当時のことを知ってらっしゃる方にお話をお伺いしそれを元に再現されたのが気になります」ということですが、この 2 つの質問も順を追ってお話ししていきたいと思います。
まず最初に、相談役は今 72 歳？

比嘉 71 歳。

翁長 小さい頃のお話から聞きたいなと思います。最後のシマハラシーの大会が 1943 年ですから、もちろん相談役もまだ生まれてない頃に、もう終わってしまったってことですね。小さい頃とかこのシマハラシー自体、そんなイベントがあったよみたいなのは、認識というか知ってたんですか？

比嘉 知っていたというより、僕は読谷村の比嘉の出身ですけれども、自分が通っていた小学校の校門の前が馬場だったらしいんですよ。ですから、お隣の人がここは馬場だって言っていて。馬場という言葉はもう小学校時代から聞いていました。近くにあったその馬場は僕らが小学校の時には県道 1 号線になっているんですよ。それからちょっと離れた所に闘牛場があって、闘牛大会とかやった時に帰りにお年寄りの方々が、闘牛大会を見た後にこっちもシマハラシーやっていたけどねという話を聞いたりしていたんで、シマハラシーというのと馬場というのは頭の片隅にあったということです。

校門の前が馬場だったんですよ。今も残ってますし、今は 58 号線が別個にできたんで、ここは今通学路みたいになっているんですけど。その馬場跡は今も残っていますから、喜納番所という前の通りがそれです。ですから、58 号線通って恩納村に行く時には、この番所の所で一休みされたらその番所の前が馬場だったということです。

翁長 なるほど。そういう幼少の頃からそういう認識があったということなんですけど、相談役が成長して青年になって 25 歳の頃でしょうか、沖縄こどもの国へ勤務されたのは。

比嘉 そうですね。

翁長 その当時、馬っていましたか。

比嘉 沖縄こどもの国に馬っていたんですよ。自分も小さい頃、新聞配達少年をしていたものですから、馬を散歩させるんじゃなくて、馬に乗って駆け足で走っている人を毎日見るんですよ。

翁長 それは地元の人？

比嘉 地元の人よ。それを見てかっこいいなと。馬を乗り回しているのは、と。

金尾 相談役が少年の時は、普通に馬に乗って走ってる人がいたんですか？

比嘉 いや、小学校 5、6 年の時。中学校まで新聞配達少年やってたから。その時に大体毎日同じところに来たらその人が後ろからパカパカパカと闊歩していくんで、おれもあんなして馬に乗れたらいいなというのが頭の片隅のどこかにあった。こどもの国に来て、与那国馬の名前が「よたろう」というのがいて、おとなしい馬だったんで、引っ張り出してきて、仕事終わってから自己流で裸馬で遊んでいました。

翁長 当時は馬の担当とかではなかったけど、仕事終わった後に「よたろう」と一緒に遊んでいたと。そんな感じで月日が流れていくんですけど、その時はまだこどもの国で馬を調教してとか、そういうことではないんですね。

比嘉 調教できる人もいないし、馬に興味を持っているのは、自分とあと一人二人ぐらいなんで。「嘉手刈林俊」っている。

翁長 沖縄こどもの国レジェンド飼育員の 1 人ですね。

比嘉 彼と二人で引っ張り出してきて、俺が落ちたら今度あれが乗る。あれが落ちたら今度はおれが乗る。

翁長 落ちたら交代だったんですね。

比嘉 そんな感じで遊んでいるのを中学生が上から見て、ゲラゲラ笑っている。お前たちもおいでって言うってから、こんどはあれ達乗せてから引っ張って遊ぶ。ものすごく楽しそうにしている。ある日、親の人が毎日馬に乗せてもらってありがとうと感謝してくれたけど、いつか乗馬できたらいいなっていうぐらいしか。

翁長 当時は動物もものすごい種類いっぱいいて、飼育員もそんなになくて、この動物につきこの担当ってことじゃなくても、みんな持ち回りでざーっと仕事していたんですね。そういう調教をする時間とかは取れないままという状況だったんですね。
そんなこんなでこのこどもの国の月日が過ぎていくわけですけど、相談役が、心の中にンマハラシーという幼少の頃から意識があって、就職して馬とも触れ合っただけということなんですけど、この一応 70 年ぶり、2013 年に復活する訳ですけど、具体的にじゃあやろうっていう「コト」が動いたというか。その時ってどういうタイミングだったんですかね。”

比嘉 チョランマルっていう馬が、今の済州島ですね。済州島から沖縄県に寄付されたんです。その時にチョランマルがまだ調教されていなかったんですよ。それでたまたま県外から訪れた外人さんが、自分たちが馬を出してちょこちょこ散歩しているときに触って、そして「この馬はまだ調教できてないの？」とみて、日本語わかる人がちょっと話をして、「全然できていません。ただ散歩だけです」って話したら、「自分たちが週に 1 回来てやってもいいよ」って言われて、「ぜひお願

いしたいです」ってなって以来、その人が来て少しずつ調教がはじまって、ぼくら後ろから付いてジッと見ていて。

翁長 ボランティアでそのアメリカ人の方が来ていただいて、調教してくれていたんですね。チョランマルに対して。

比嘉 そのボランティアに来た外人の方が、あやさんが行っていた當間クラハ乗馬クラブ。向こうは外人の方が馬を使用したりして、自由にやっている、ということもあったみたいで、そこに「當間嗣平」っていう人、自分の同級生がいた。そのクラブ、乗馬クラブが関係していて、そういう人たちがよく出入りしていた。ここら辺は、あやさんがよく知ってるんだけど、そういう関係があって、當間さんとながりができて、それから子ども達に乗馬体験させたいなという時に、當間さん所のウマをつれて、あやさんなんかは体験させてあげていた。これが最初のこどもの国の乗馬体験となっています。

翁長 この時はあやぼんは、クラハ乗馬クラブに通っていたわけですね。

木下 そうです。大学のサークル活動で、通称「うま部」。乗るより世話がメインみたいなクラブで、私はちょうどその済州馬（チョランマル）が来た年ぐらいからピッチピチの大学生でそこにいた訳なんですけど。この乗馬クラブに来てたのはアメリカンの人達が、例えば本国で乗っていたり、馬持ってたけど、置いてきちゃったから、寂しいからこっちで乗るか、場合によってはこっちで馬をゲットしちゃって、クラハに置いて世話をして、とかっていうような人達がいっぱいいて。私達のサークルもそういう人達をインストラクターにして教わって乗馬やってたし、世話やってたし、引馬であちこちでその馬達の食い扶持稼ごうってなったら、私達はそうやって働かせてもらってというか、引馬させてもらう代わりに、ほぼほぼタダでその馬を乗せてもらったり、一頭當間さんのところに置かせてもらったりして活動していたんです。

翁長 それがあやぼんの学生時代。学生時代だからぼくがこどもの国に入るより前ですね。何年ぐらい前ですか？

木下 1997 年ぐらいからですよ。

翁長 そこで当時ぴちぴちの学生だった。こういう引馬とかしつつ。ゴールデンウィークとかにやっていたんですよ。こどもの国も。

比嘉 そうそう。

翁長 で、そのような乗馬体験ができるようになってきたんですけども、そこからンマハラシーまでどうつながっていくんですか。

比嘉 だから、その時に當間さんの所の馬を呼んでここで乗馬体験したりしてやってから、當間さんが

ンマハラシーをあんたがたの所でできるねー？やってみたいね、やれたらいいね、みたいな感じの話をしているときに、彼女が資料を當間さんにあげて、ンマハラシーに関する話をそれがええっと。

翁長 メモが出てきましたね。

比嘉 沖縄総合事務局委託、馬場跡の調査資料。それを図書館で見つけてコピーして當間さんにあげたのが、當間さんからぼくのところに。

翁長 凄い！それってこどもの国入る前に、そんな重要な役割を。

木下 実はしてた。

翁長 すごいね！

木下 もういつだか覚えてないんですけど、當間さんがこの琉球競馬を復活させたい、復活させたいってずっと言っていて、じゃあちょっと大学に行けばあるかもしれないからって、琉大の資料を色々調べてたら、勝手に借りたりできないところにその資料が見つかって、コピーだけ取らしてもらって回して、そしたらこっちに回ってきた。

比嘉 これね。

翁長 すげー！これ実際あやさんがコピーしたやつ？

木下 わかんない…。すげー！かもしれないです。

翁長 すごいね。これ感慨深くない？

木下 学生時代に図書館に入り込んでやったやつ。

比嘉 この資料はふれあいとか、公園とか。国建さん（株式会社国建が沖縄総合事務局の委託を受けて『沖縄県における馬場跡の調査報告』が発刊された）とかやった時コピーしてあげたやつ。

木下 私がコピーしたやつじゃないかな？私こういう資料つけるので。多分私がコピーしたやつだと思います。もう院生になってました。

比嘉 抜粋してある。いいところで、必要なところだけ取ってあって。全部じゃなくて結構厚かったんじゃないかな。要りそうなおとこだけ取ったと思います。

翁長 それであやさんがコピーした資料が巡り巡って相談役の元に届き、これでンマハラシーとなるんだ。

金尾 それは、あやぼんはご存知？

木下 巡り巡ってきた。當間さんに色々言われていた。巡ってきたことは知ってました。

翁長 すごいね。本当に何がきっかけってどうなるか分からんね。本当に。コピー取ってた時はまさかこどもの国で働くなんて。

木下 思っていない。全然。

翁長 まさかこの自分のコピーがンマハラシー復活につながるなんてね。すごいね。

金尾 これ知ってるスタッフほぼいないよね。

翁長 自分も初めて知った。

比嘉 だからンマハラシーについてだったら、こっちでよくわかるよって。そのきっかけを作ってきたのはこれが結構繋がりがあるけれど。チョランマルがうちにいて、チョランマルからきっかけを作ったのは。

翁長 すごいね。

木下 きっかけがチョランマルってのは知らなかったです。

金尾 保存して記録しておかないといけないですね。

翁長 まさにその時、歴史が動いた。すごいね。

金尾 でもそういくと、韓国の済州島の方を沖縄の人が助けなかったらチョランマルの寄贈もないですもんね。

翁長 そしてこれでンマハラシーっていうのが、もう具体的にどんなものなのかな〜というのがだんだん分かってきた時に、じゃあそのンマハラシーをやろうというのは「ふるさと雇用」もきっかけですか。

比嘉 それで馬専属の何かできないかっていう時にこの話が上がり、うちが手を挙げて沖縄市役所をお願いしにいった。

翁長 「ふるさと雇用」(厚生労働省により実施された『ふるさと雇用再生特別基金事業』)というのは沖縄市さんが、そのふるさととの地域の資源を使って何か事業を立ち上げましょうっていうことがあって、それで何かありませんか？ってこどもの国に話が来た時に相談役がンマハラシーのこと

もあり、乗馬の専属のスタッフを雇って、与那国馬を活用して、それで乗馬をうちのスタッフでできるようにしようということで、事業を申請してそれが通ったんですね。そして、この馬の専属のチームがそこで作れて、だんだんその馬を調教したり、乗馬したり、土壌が出来上がっていったということなんですね。

あくまでそのふるさと雇用を取ったというのは、相談役の中では単純にその乗馬体験を子どもたちにさせてあげたいということでももちろんあるんですけども、その時はもうンマハラシーをやりたいっていうのはもう頭の中にあっただんですね。

比嘉 ンマハラシーはやりたいけれど、どういう形でやれるかっていうのは分からんけれども、結局、この資料で見ていて、あ、こんな感じでやるんだとか、こどもの国で 100m、200m 取れる直線コースってのはないじゃない。側対歩の走りをさせるとかわからないんで、この事業が3年ぐらいいかな？でも、どうだったかな。でも子どもたちでも、もちろん馬に興味あって乗れる人が馬に興味を持って乗りたいという人が増えれば、乗り手がいれば何とかなるねってなって、馬に興味を持つ人口が一人でもいいから増えてくれたらいいかなっていう感じでした。あの時は、自分たちのところで自前で馬の世話をして、調教もして、子どもたちが乗ってそして最終的にはその子ども達自体が自分で馬に乗れるようにするにはどうしたらいいかみたいな感じでした。

翁長 じゃあそれを目指して「ふるさと雇用」を活用してやっていって、スタッフもそうやってできる形になってきた時に、その次の段階として、このいわゆる「伝統文化観光推進事業」ですよ。

比嘉 この資料の時にすぐ手を挙げて。

翁長 またこの「伝統文化観光推進事業」（沖縄市が実施した『沖縄市伝統文化観光推進事業』）というのもこれは沖縄市さんの事業で、いわゆるもう名前の通り、その沖縄のその伝統文化を活用して観光に資する事業をまた何か作っていこうということで、相談役はもうこれで満を持してバッチコイ、ンマハラシーやるぞってなったんですね。

比嘉 ンマハラシーもやるけれども、どんなしてやるかってなって。

翁長 事業は採択されたんだけど、白紙だったんですよ。

比嘉 だからもうそれをやった後にはもう博物館以外ないし、「くら」「あぶみ」どうやって作るかって。

翁長 この伝統文化観光推進事業の方から、僕がいわゆる事務局みたいな形で相談しながら進めたって感じですけど、その一番最初に復活させることになって、とりあえずンマハラシーをやるということが決まったんですね。でもどうやっていくっていう話になって、「ってかンマハラシーって何？」みたいな話もありつつ、その時間き取り調査とか結構しているでしょう。地域のこういうンマハラシーを覚えているとか、詳しい話があるといってお話を伺ってましたよね。あの時ね。

比嘉 それでンマハラシーの場合は、側対歩で走らせないといけないと言うのと、4つの足のうち1本

は地面に着いてないといけないというルールがあるんで、それをどうするかっていうのが悩みの種だったんだけど、そこにやっぱり何かあれば花城薫さんという、県の馬術連盟理事長さんが、こどもの国で沖縄県の馬術大会が開催できないですかねということで相談に来たんですよ。相談に来た時に、要するにこどもの国に40m四方の場所はないですよって言って、嘘だと思うなら一緒に見てみましょうと言ってみたら、どこにもそれだけの場所はないんですよって言って、そうですかっていう形で納得してやって、でもこの人捕まえてかないといけないって思って。シマハラシーやりたいんだけど、「側対歩」「早足」の乗り方を教えてくださいって。ことで、馬術連盟の方に指導してもらおう。その時はプランもまだできてない。ただ乗り手、うちの職員がどういう馬の走りをさせればいいのかっていうので、昔僕らの頃は側対歩とか早足っていうのが、あんな感じで乗ればできるんじゃないかということをやったら、県馬連は側対歩がご法度ということとで・・・

翁長 現代の馬術では駄目なんですよ。

比嘉 減点対象になるって。それはマジかあと思って。

翁長 でも最初は県の馬術連盟の花城さんとか島袋さんとかですね、関わっていただいたなという印象だったんですけど、その前段回でシマハラシーとは関係なしに大会できないかっていう相談があったんですね。その時に相談役が「しめた！」ってなって引きずり込んだんですね。で、そういった形で馬術連盟の皆さん、馬のプロって言うか馬に詳しい方たちですから、その馬の動かし方というのよく御存じの方なので、そういう方たちにも指導、お力添えいただきながら、側対歩や早足の訓練をしながら、シマハラシー大会自体どうやってたんですかっていう聞き取り調査でやりつつっていうところで、その当時にその「照屋寛徳」さんとか「宮里朝光」さんとかにお会いしてるんですよ。「照屋寛徳」さんはどんな繋がりでしたっけ。

比嘉 照屋寛徳さんは「チャーン保存会」の方で、こどもの国のふるさと園で鶏鳴大会といってチャーンの鳴き声大会。それでシマハラシーの話をしたら「おれ見たことあるぞ」っていうことで、すごいなーと。

翁長 照屋さんはかなり詳しく覚えていらっしゃってて、それであと宮里朝光先生は琉球競馬の本の中に宮里朝光さんの話が出てきたので連絡先を教えてもらって、あいさつ周りをして、自分達がこれの試作品を作っている時に奇しくも、梅崎さん、スポーツニッポンの競馬の記者さんが書かれた。「消えた琉球競馬」がボーダーインク社から出版されているんですけど、文化賞も取ってるんですね。これがものすごくいいですよ。ぼくらがどんな風にしてシマハラシーやったらいいとか聞き取り調査とか行ってるのとほぼ同時期にこれ出てるんですよ！びっくりするぐらい詳しく書かれてるんです。いろんなこと。やっぱり記者さん。取材の力というのはすごいなーと。これもバイブルになりつつ、色んな聞き取り調査を行いつつという形だったんですけど。「照屋寛徳」さんと「宮里朝光」さんは本当にキャラが違って、すごいおもしろかったですよね。照屋さんは本当にうるま市のいわゆる農民の出の方で、本当に好きでシマハラシー、宮里朝光さんは首里の武士の生き残りで。

比嘉 宮里朝光さんから、先生から言われたのは、側対歩ができなければンマハラシーではない。言われたんですよね。ちょっと待ってくれよ。側対歩も出ますけど、四つ足の1本がつけばいいっていうのがありますから、側対歩出なくて早足でもいいじゃないですか。いやダメって！

金尾 ンマハラシーではいろんな走り方があるって聞いたんですけど、今言ってた側対歩じゃないと絶対ダメなンマハラシーもあれば、地域ではいろんな形式で開催されていたと、その中で足1個着けてたらOKっていうのもあったんですね。私1回久米島の金城睦明さんに聞いたら早いのが強かったよって言ってたから、色々あるのかなって思ってたんですけど。

比嘉 ンマハラシーは結構早く走ってた。だからさ、早足だけの競争にさせたらサラブレッド調教できれば早いわけよ。在来馬の代わりにならないので、本当は側対歩であっても、在来馬でも側対歩の出ないのがいる。うちの与那国馬は、普通は並足で歩いてる時は側対歩なんです。自分はそれを見た時にこれだと思って、あの花城さんにこの歩き方で走らせる練習できないですか？やってみよう！ということで走らしてみても、チョランマルとか、与那国馬のナビィがちょっとできるとか。どうしてもちょこっとはできるけど、途中から斜体歩になるわけよね。でも1本つく。ちょこちょこちょこって。でもあれはもっと可愛いんだよ。競争があったんだらうなっていうのが分かってで、やっぱり見ている時にはこれだっていう人もいるし、側対歩だって宮里朝光先生は頑として側対歩だと。これ首里の

翁長 首里の伝統と格式でしょうね。それ以外は認めませんっていう。首里文化ですね。

金尾 頂上決戦っていうか。

翁長 かなりそうですね。伝統大会の一番の大会。いわゆる王家直轄の馬場ですからね、あそこが。でも今結構、側対歩、側対歩って言ってますけど、では実際側対歩ってどんなやつってのをちょっとお見せしたいと思います。

金尾 2016年の第8回目のンマハラシーの様子を流したいと思います。

<映像流れる>

金尾 右側がチョランマルのナナミで、左がちょっと映像が荒いですが、左が与那国馬のどうなん。

比嘉 どうなんは斜体歩だよ、これ。

翁長 どうなんはちょこちょこちょこって早いんですよね。一方ナナミは側対歩で上がって来るんですよね。

翁長 右前足、左後脚が出る。いわゆるなんば歩きって言うんですか。

翁長 一生懸命やったのに。これ先に到着したのが与那国馬の方ですけど、ナナミが遅れて、あ、きれいに側対歩が出ていますね。で、勝敗はいかがでしょうか。と言うことですね。

比嘉 これはもうダントツにどうなんに上がりました。

翁長 はい、というところで。今のが側対歩ですね。

比嘉 こどもの国にいらした時にゾウの歩き方をしっかり見てみてください。あれが側対歩。

翁長 なるほど。右前足、右後脚、左前脚、左後脚が交互にこう、走り方が側対歩といって、ンマハラシーでも重要な走り方ということなんですね。その聞き取り調査も行いつつですけども、このへんと、あやぼんも着ています知花花織、こういったものの復元。これも「和鞍」なんですけど、これもあれですよ、諸見民芸館や読谷の資料館とかに行きましたよね。これも現存している「和鞍」というのを見せていただいて、これがその先ほど試作品。これはうるま市の県認定工芸士高良さんっていう方をお願いをして、こういうのも復元しつつ。これは郷土博物館。市の郷土博物館がいわゆるンマハラシーの時に着てたという知花花織、袴、これも知花花織事業協同組合の皆様にご復元いただいて、そういった形でどんどん事業を進めていく。そして第1回記念すべき2013年3月2日と10日に復活という形になったわけですね。どうですか当時を振り返って、

比嘉 短期間で2日間というのはどっちがいいじゃなくて、なんていうか予習。予行演習。予習がそのまま大会というような形で、終わった後に大会という位置付けになってしまったんだけど。要するに馬主さんも出る人も「ンマハラシーってのはなんね〜？」という形で、喧々諤々やるので、もう一回は予行演習するからやりましょうって言ったらみんな「おお、いいよ〜」っていう形にやって、一応それが第1回大会になったんだけど。まあ説明したらすぐそういうような感じで、こんな感じでやるよという形で、やっぱり現実的に走ってみて。だから今日は練習です。次が本番だよ、ということで、1回目も大予行演習、本当に2日は大予行練習で何回も走っている。そういうのを確認しながらやったんですね。芝の広場でやってるんですけど、あれ50メートルしかないんですよ。50メートルの馬場ってはあるのかなと思ったら。あるんですよ。宮古で。宮古島の放牧のところに50メートルのところで練習していたと。ンマハラシーに出るための練習場として、50m走っていた。これならこどもの国でできるっていう形で、メジャーで測ったら70メートルぐらい、50メートル取ればUターンしてできるなっていうことで、これでよしと、ここでやるしかないなあということで、それも説明して、馬はこういう風に走って。だから全力を出したら駄目ですよ。っていう形でやって。もう予行演習をやった後はみんな落ち着いてじゃ次の10日の大会に備えてやりましょうという形になったんですけど、正直言って2日の第1回大会というのは大予行演習なんですよ。一人ひとりをその場に呼んで、一人一人を説得し、これがンマハラシーですよって。乗馬そのものにも興味ない人にも、こういうものがありますからって。本当に乗る人も出てきたんですよ。本当に馬に持ってはいるけど、なかなか乗れないんですよ。

翁長 飼って満足してるんですね。

比嘉 ほとんどの人が飼うだけだね、まだ仲が良いでないと。だから私から出場お願いしに行ったら、「わかったよ。でもよく分からんなーっ」で言ったから。2 日は大予行演習ですから来てくださーいと。来ないともう、みんな集まって走ってみないとわからないじゃないですかって言ったら、OK という形で。じゃあ次の大会本番に向けて、よろしくお願いしますという形になって。最初の 2 日の大会は結構長い時間かけてやってみて。

金尾 現場が混乱していた記憶があります。

翁長 そうそうあの時。

比嘉 結局、大予行演習だよーって言っても、この人が第 1 回大会ですって言って。

金尾 みんな本気でしたよ、結構。

比嘉 で、終わったあとよ、これを第 1 回大会って言って。

翁長 あの 3 月 2 日、その乗馬クラブとか回りながら説明して、来てくださーいってやりながら、その時は 19 頭来てくれてるんですね。で、その翌週 3 月 10 日には 24 頭で。

金尾 2013 年、ということは今年 9 年目か。

翁長 そういうことになるのか。あっそうだね。来年 10 周年ですね。

金尾 ちょっとコロナで今止まっていますが。

翁長 はい、そういう形でやってそれにあれなんです。これはその当時、いわゆる勝敗、いわゆる一対一で対決して速さプラスの美しさ、衣装とかも含めてこの人馬一体の呼吸も含めてこう競うってことなんですけど、その僕、久しぶりに資料を読み返して思い出したんですけど、最初はあれなんです。結構、県馬連の皆様が結構細かくルール決めてて、駆け足したら-2 点とか結構細かいルールでやってる。でもそれでやって大いに揉めて。

比嘉 それが最初の大予行演習で。

翁長 これで大いに揉めたんで。次からいわゆるもうこれは照屋寛徳さんと宮里朝光さんに来ていただいて、当時を知ってる 2 人が紅白旗上げて試合を決する。あと花城さんがやって、この 3 人がいわゆる紅白旗を持って、いわゆる勝敗を決めるので、もう文句は言わないでください。一切クレームは受け付けません。これでやります！っていう。宮里朝光さんと照屋寛徳さんが言うんですから、見てたんだから。

金尾 実際にンマハラシーを見てた人ですからね。

翁長 でもやっぱりンマハラシーこの「消えた琉球競馬」に書いてますけど、やっぱり勝敗がすごい微妙な競技なので、結構勝敗で揉めたとかあるみたいですよ。やっぱり一族を誇りというか、それを賭けて、戦っているというのもあって。そういうのもあったみたいですよ。その3月10日も終わりました、この平成24年に、2013年に復活と言う形になりましたけど、どんなでした。何か感慨深いものがありましたか。3月10日終わって。

比嘉 まああの準備するのは大変だったけど、終わった時には、これから先このポイントの側対歩を、競走っていうのはどんなしてやればいいんだろうと。今でもそれは思っています。だから本物、何が本物かわからないけど、ただやっぱり側対歩で走る馬っていうのは、一頭でもいいからちゃんとしたのが馬を育てきたらいいけどな。個人の馬主さんとか乗馬クラブでも、そういう馬を保存してくれたらこれからゆっくりではあるけども、毎年1回ずつか、1回ぐらいは開催できるんじゃないかなっていうのが思いますね。あとは乗る人。乗り手っていうが、昔はその馬は持っているけれども、馬に乗る人は他の人を頼んできて、超うまい、この人馬に乗せたらすごいよっていう若者をお願いして。

翁長 割と専門の人がいたみたいですね。

比嘉 そういう人に乗ってもらって大会をやるという。馬は馬が好きな人が育てて、乗る人は乗る人で馬が好きならという感じで、別々でもいいので乗馬クラブで乗るのが上手くなってやっていってと。好きで馬を飼っている人はやっぱりそういう育て方ができたらいいなっていう感じです。

翁長 そうですね。確かに側対歩で物凄く速く走る馬ですね。育てたいですよ。相談役が何年も前ですけど、持ってきたあの母衣（ほろ）引き。あれも側対歩で物凄く速く走るな一つ。

金尾 母衣引きってなんですか。

翁長 宮廷いわゆる皇室の行事で今もやられてるんですけど、馬に何か凄いい。何かこうお馬さんに長い布っていうか旗みたいなのを付けて、側対歩でブワーッと走って、地面に着かないように。

比嘉 宮里朝光さんが話していたのは、沖縄の馬でもちゃんと側対歩で走ったら、尻尾に布を付けてそれが一直線になる。地面と一直線。そういうものがやられたりしたらいいねって。それが側対歩なんだよ。それがンマハラシーの馬なんだよということをずっと言われていて。

翁長 ということで、この平成27年度ンマハラシー復活と2013年ですね、以後こういった伝統文化観光推進事業ということでこどもの国に位置づけて、以後、大体年に3回ぐらいコンスタントにンマハラシーをやっていくんですね。そのンマハラシーをやっていくにつれて、色々本土の方とか環境とか。結構いろいろな方たちとの関わりがあって、いわゆる翌年の2014年は流鏝馬競技連盟東北支部の上村鮎子さんもいいじゃないか。いわゆる流鏝馬もいわゆる側対歩で走る、上下運動が少なくなると非常にサーッと走るの、流鏝馬も同じこういう馬からこう弓でバンッと射るということで、あれも側対歩なんですね。ですから、その流鏝馬のスペシャリストの上村さ

んに来ていただいて、そしてあれなんです。よく翌年、2015 年にあれですよ。北太平洋シーサイドライン乗馬クラブの安藤さん、阿部さんに来ていただいているんですね。いわゆる北海道から来ていただいて、ゲストの方、いわゆる北海道は北海道和種がいますので、そして北海道和種はあれですよ、先天的に側対歩っていうのがものすごい出るって言われてて。

木下 そうなんだ。だからマリモも？

翁長 そう、結構北海道和種は出るらしい。先天的に。かつ、安藤さん阿部さんが側対歩の調教っていうのを今もできる人なんです。そこで3年連続ぐらい安藤さん阿部さんが来ていただいているんですけど、そこでどんなですか、安藤さん阿部さんは？

比嘉 やっぱ馬の扱い方というのと、初歩的な調教というのを教えているんで、安藤さんが若い時からずっと馬が好きで、乗馬では結構良い腕を持っているという。調教するには北海道でも、他のところから馬を調教してほしいということで、馬を歩かしている。要は北海道でもさっきみたいに側対歩で走る、側対歩で走る競争っていうのがあるので、そういう大会に出る馬をやるために側対歩で走らんといかんからということで、安藤さんが調教したりしてる方なので。でも根気が要る作業だなと。その話を聞いた時に、自分達が今側対歩で走っているけれども、ちょっとスピードが出たら斜体歩になるんで、その繰り返して練習していたんです。でも迷う感じで、本物のそういう形で。また先天的にそれが言える馬に出会えたら、それはそれで教えることはできるけれどもなかなか。与那国馬でも出ないのは出ないらしい。うちのは並足で側対歩出るよっていうのと、一頭も出ませんっていうところもあるんで。並足でも側対歩はやりませんっていうのは、うちのも2頭出るよって。側対歩っていう馬の遺伝子を持っているのが少なくなっている。馬の頭数も昔は8000頭とか10000頭まで飼育されているから、その中からそういう遺伝子を持っている馬を探せたんですけど、今はもう馬の頭数も少ないんで、なかなか出会うってのは少ない。機会は少ないかもしれない。

翁長 安藤さんが来ていただいたんですけど、覚えてますか？安藤さんが来て、調教して、帰られたんですけど、ずっと相談役が「あの人は本物やっさー」って言ってますね。覚えているのが「なぐに」がまだ生まれてそろそろ乗馬しようかみたいな話の時に、安藤さんが来て、ンマハラシーの前日に来て調教してですぐ出ていましたよね。「よな」も「なぐに」も。印象的な。あとその翌年が2016年になるんですかねあれなんです。あの元JRAのジョッキー岡部さんが審判で参加されたり、この時に現役ジョッキーの「田中勝春」さんとか、実はンマハラシーに出場をいただいたりしてるんですね。でそんなこんなで過ぎていき。そう、その時に相談役が北海道に呼ばれたんですよ。僕もかばん持ちでついていきましたけど。無理やり。あの時に北海道あのじみち、北海道で側対歩のことを「じみち」っていうんですよ。

金尾 どんな字で書くんですか？

翁長 平仮名で「じみち」という側対歩のことを言っていて、向こうの言葉でね。このこどもの国のンマハラシーきっかけで向こうも「じみちコンテスト」っていうのを始めている。その時に2回目

の大会に相談役がゲストで審査員として北海道に呼ばれ翁長さんは用事もないのについていて。で一緒に参加したっていうことなんですけど、あれは札幌競馬場でしたね。あれはどんなでしたか。

比嘉 やっぱ土地が広いだけに競馬場も広いですけど、札幌のところの練習場、大会やったところも広いですよ。

翁長 広がったですね。

比嘉 そうというのがあれば良いなというのか、羨ましいな。

翁長 結構出た馬もみんな側対歩でしたね。

比嘉 側対歩できるんですよ。北海道和種は側対歩出る馬が多いってのは本当だなーと。馬自体が沖縄の与那国馬より、宮古馬よりちょっと大きい。どっちかって言ったら済州馬の大きさぐらいしてるんで、大人が乗っても違和感ないんですよ。でもうちの与那国馬に大人が乗ったら馬がかわいそうに見える。やっぱ無理に見えるので。ちょっと寂しいかなーと。北海道和種は結構外国人の方が乗っているけど、問題ないっていうより、かわいそうだねってならない。でかいだろうなって思ったら、そうなった時は沖縄の在来馬だと。でも沖縄の在来馬も昔はあれぐらいの体型をしている。

翁長 小っちゃくなってるんですか？

比嘉 小っちゃくなってる。これは結局南に行くほど頭数が少なくなっていくのかもしれないけれど。ちっちゃい個体とちっちゃい個体の掛け合わせで。

翁長 そうなると、どんどんちっちゃくなりますね。うちのどうなんとか、与那国生まれだからちっちゃい個体なので。小柄な人が乗るならいいけれども、ななみとかチョランマルのマールとかオスの方はそういう感じで見られないですね。子どもたちが見ても違和感感じないようにするには、昔は特にやっていたけれども、沖縄の在来馬をやるんだったら、小学校6年生から中学校1、2年生ぐらいの平均的な子どもが馬に乗ってくれるのが1番体型的に良いんじゃないかなって。そのためにはこどもの国っていう看板を掲げているから。他所から持ってきてやってもいいし、うちの在来馬使ってやるとしたらこどもたちに頑張ってもらう。与那国馬に合わせた大会。

翁長 それとンマハラシーの時の、第2回2014年の大会から、結構他の乗馬クラブさんとか参加者さんも次世代への継承なども意識なされていて、子どもたちを育てたりしているので、2015年にはこどもの国でもンマスクールというのをスタートして、子どもたちに乗馬してもらって最後ンマハラシーに出場するというのもやってますね。ここ最近はなかなか大会もできずにきてますけど、琉球新報さんが最近在来馬の保存・活用へ力を入れられていて、相談役が琉球新報主催のシンポジウムに12月登壇されて一応今年度も、令和4年度も琉球新報さんの主催で馬教室みたいなもの

別途でやってくれないかという話になっていてですね。かつ、シンポジウムもされるそうなので、また相談役出番があると思いますのでよろしくお願いします。

はい、ということで、大きな節目も来るということなんですけど、そろそろもう1時間になりますけども。話の節々でだいぶお話いただいているんですけど、最後に今後のンマハラシーの展望というのを、こうなったらいいなとか。そういう乗り手とか、馬の調教とかってこともお話しされてましたけど、何か将来的なこうなったらいいなとか何かありますか。それでびしっと締めたいなと。

比嘉 いやぁ本当は100メートルの馬場が園内にできるかできないかは、結局あれば良いかなと。そこを本当に2頭の馬が走るっていうのができたら良いかなと。皆さんが園内のどこかで作ってもらえたら。

金尾 沖縄こどもの国馬場ですね。

翁長 馬場を作らないといけないということか。おっしゃるように、そのいわゆる真の復活じゃないですけど、もうンマハラシー復活しましたと、なかなか今言えない厳密に状況もあるという中で、そういうのを力強くこれがンマハラシーですと、言えるような状況まで持っていきたいですね。それは環境。施設的な環境もそうだし、乗り手も馬も全て揃って完全復活と。またそれが定期的で開催されていく。

比嘉 で、もう1つは流鏑馬も復活してくれたら良いかなと。流鏑馬もああいう形で勉強したのは、さっきから言ってる宮里朝光先生が、首里で「崎原馬場」で流鏑馬の練習をしたという、個人が書いた記事みたいのが博物館に寄贈されて、それにちゃんと記載されている。沖縄には流鏑馬はないって言われているんですけども、武士がいたのに流鏑馬がないってことは無いだろうと、こっぴどく怒られて、それでじゃあ流鏑馬もやってみましょうという形で言ったんですけど宮里朝光先生も流鏑馬は見た事ないので、話をした時には非常に喜んでいました。結局刀も弓も沖縄にはちゃんとあったんだよ、だから流鏑馬がないわけがないって話をされていて、それでそれが書かれた文献っていうのがこの個人から寄贈されたのが県立博物館にあるから、あんた言って読んできなさいって言われた、昔の字が読めるわけじゃないじゃないですか。本当の資料かどうかをまだ確認していないんですけど、あの人が言っているから間違いない流鏑馬はあんまり馬はできないんですけど、在来馬がいて、ンマハラシーもやるけれども昔の沖縄の流鏑馬というのはあったと。実現してもらえたら、私は残り少ない人生で。

翁長 今なくなってしまった文化を掘り起こして、再現して、それをまた伝えていくってことですね。

比嘉 だから一時期、本土の方ではスポーツで流鏑馬って盛んなんでってことで、やっぱり乗馬がうまくなれば次に何かしたいってなったら流鏑馬よっていう形で。来年ぐらいから良いかなと思うけど。

翁長 日々の努力ですね。でも、流鏑馬いい思い出なくてですね。うちで「ナージキー」というイベ

ントをこうやって流鏑馬で生まれた馬の子の名前を決めるとしてスタッフがこう流鏑馬するんですけど、全然当たらない。もう脇汗しか出ない。もうあれは勘弁してほしいです。

金尾 やっぱスタッフがコツコツ練習するしかない。もう少し聞き取りとかって続けたりする可能性ってあります？相談役とか翁長さんが聞き取りにいったと思うんですけど、やっぱそういう資料って圧倒的にあんまりないってことですよね。

比嘉 だから自分達が行った時にもあと4、5年早かったらこころ辺にいっぱい人がいたかもしれない。でも今もういない。その話してる人が自分より詳しい人いたのにねえっていうことをおっしゃっていたんで。

金尾 それが10年前ですもんね。

翁長 本当にこの取り組みあと数年遅かったら難しかったと思います。当時を知っている方はもういないって状況ですもんね。

金尾 70年途絶えていて、その頃覚えてらっしゃる人で、しかも戦争があった。

比嘉 今ホントにそれを分かる現場にいたっていう人は、大正7、8年、てなったら100歳位余っていると思う。自分達がやった時には88歳過ぎている人に出会ったんで、寛徳さんなんか。

翁長 あの時寛徳さんが93歳で、宮里朝光先生は87とかぐらいで。

比嘉 自分のお袋が今年90で、カジマヤーを迎えるんだけど、本人はシマハラシーの会場には行かなかったけど、シマハラシーは見ないで近くにある出店で買い物して遊んでたって。大体その年齢の人たちはそういうことで。子どもだから。それから上の人らになって、本当に知ってる人はなかなか難しいだろうな。

翁長 ということで、長々お送りしてきましたけども、今回は比嘉相談役。またあやぼんもお招きして、この琉球競馬シマハラシー復活までの道のりということでお届けしましたが、実はまだ復活していない。本当にこのシマハラシーの取り組みは、やっぱりその在来家畜の新たな活用、その遺伝子系の保存ということもそうなんですけども、それがまた観光だったり、その誘客だったりして、またその文化をまた次世代に継承していく。やっぱりそのうち次世代に継承していくからには、やはり必要とされないと生きていけないわけで、やっぱりそういう場もどうやって作っていくかっていうのがやっぱり大きな今後の取り組みになってきますけども、またこう2023年がシマハラシー復活10周年ってこともありますので、またこどもの国として取り組んで、真の復活に向けて取り組んでいきたいと思っておりますので、また皆さんも引き続き楽しみに待っててください。はいよろしくお願いします。できれば、皆さんも馬を飼って、側対歩を調教してもらって、それでシマハラシーとかに出てもらえれば一番嬉しいなというふうに思いますけども。

はい、ということで締まったのか締まってないのかわかりませんが。今回のゆんたくコミュニティはこれにて終了したいと思います。”



ライブ配信「琉球競馬ンマハラシー復活までの道のり」配信時の様子

●コラム 琉球競馬「ンマハラシー」と「ンマスーブ」

佐藤 寛之

かつての沖縄、琉球の地にはンマハラシー（馬走らせ）とンマスーブ（馬勝負）という2つの種類の競馬が存在していました。ンマスーブは主に首里の士族の間で行われた競馬で2頭が並んで側対歩（同じ側の前足と後ろ足を同時に出す歩き方）で馬の向きをまっすぐに維持したものが優れているとされました。一方ンマハラシーの方は肌馬にまたがって全力疾走させて速さを競うという競馬だったようです。元来琉球の競馬は士族の間でのみ行われていたのですが廃藩置県などで士族階級が消滅し、首里を離れ各地に移り住んだ元士族がこうした競馬をたしなんでいたようです。その後馬を持つ人口の減少などで両競馬は規模を小さくしていきました。どうもその過程でンマスーブとンマハラシーは名前が混同したりして伝わったようです。沖縄こどもの国のンマハラシーは内容的にはンマスーブのようなのはこの辺に理由があるのかもしれない。

●コラム 沖縄の馬場跡

佐藤 寛之

沖縄はかつて琉球国と呼ばれ他国（中国）との交易で栄えた王国でした。その際の主要な輸出品の一つが「馬」だったため、琉球国は馬の増産を奨励していました。沖縄島の各地には牧志、牧原、牧港のような「牧」の付く地名や〇〇馬場と名のつく場所がたくさんありますがそれらは生産拠点や競馬場の名残だったりします。そうした馬が多い環境下でその馬の能力を競う競馬が各地でさかんに行われていました。競馬を行う馬場はンマイーなどと呼ばれ沖縄県内だけでも200近い数の馬場があったということなので如何に競馬が身近な存在であったかがうかがわれます。両脇に松並木の土手をしたがえた幅広の直線からなる馬場はンマハラシーの際には多くの人で大変賑わいを見せたとのことでした。現在ではその多くは道路や住宅などへと姿を消してしまっていますが今帰仁の仲原馬場や首里末吉の平良マージのような現在でも当時の様子がわかるような馬場跡もあります。

第3章 宮古島における在来馬の聞き取り調査

佐藤 寛之・佐次田 隆弘

宮古島は琉球緒王府時代から馬の生産拠点の中心の一つであった。現在琉球列島に残る在来馬3種、トカラウマ、宮古馬、与那国馬のうちの一つである宮古馬の生息地にあたる。今回宮古島において宮古馬にかかわる方々に現状と課題についてお話を伺うことができた。

◆宮古馬の現在の飼育状況

現在宮古馬の生息頭数は49頭でここ数年横ばいの状態である。島内でのみ生息しており（宮古馬保存会の有志と荷川取牧場）、島外に出ている宮古馬はいないのが現状である。50頭をめぐり島内島外での利活用の道を模索する予定とのことである。近交による遺伝的劣化を考えると宮古馬の次世代に向けての保全という点では一概に何頭いれば大丈夫ということは言えないが、現在の倍の100頭前後に近づけておきたいというのが関係者の目標であるようであったが、現状では飼育可能な頭数の上限に近づいてきているようで島内外での利活用、馬主の開拓が求められているのが現状のようである。

◆島内での宮古馬と島民の交流

荷川取牧場ではコロナ前まで小学校などでの乗馬体験などの交流事業を行っていたようだが昨今の新型コロナウイルス感染症の感染拡大以降中止し再開に至っていないとのこと。

浜競馬として歴史のあったサニツ浜でのイベントサニツ浜カーニバルで浜競馬が行われていたようだがこれもコロナ禍にあって祭りそのものが中止され、現在復活の予定はないとのことであった。

こうした現状で宮古馬を宮古島内で触れ合える機会がかなり限定的になってしまっているのは宮古馬の保存にとってはマイナスに作用することが危惧される。

◆利活用に当たっての課題としては

- 1) 馴致、調教し人を乗せることのできる宮古馬がほとんどいないため、調教をおこなえる人材の雇用は必須であろう。
- 2) 馬を保存、飼育しているところに利活用の方法や企画を任せてしまっている印象を受けるので、飼育負担の軽減とともに活用のアイデアをになう人材の確保も必須であろう。

これらの体制が整わないと島外へ宮古馬を出すことができないので行政の支援も含めて優先度が高い課題と考える。



宮古島市 鏡原馬場跡



浜競馬がおこなわれていたサニツ浜



宮古馬（荷川取牧場）

第4章 伊是名島における琉球競馬の聞き取り調査

三輪 千恵子・島田 晴加

沖縄県内で最後まで競馬を行っていたとされる伊是名村で調査を2022年12月19日～21日で実施した。年齢40代以上の村民へ聞き取り調査を行うと、その多くに未だ「ウマンツミー」「マーウイ（馬追い）」と呼ばれる競馬の記憶があり、確かに行事としての競馬が近年まで行われていたことが分かった。しかし、その形式は伊是名村の4つの集落ごとに少しずつ異なっており、文献や写真などの資料は少なく、そのほとんどは口伝として残っているのみである。

各集落で共通する事項としては①旧暦4月29日ごろに「うがみごと」（礼拝行事の1つとして）として行っていたこと、②比較的若い年代の馬に乗りなれた騎手が裸馬に乗り、全力で馬を走らせて速さを競っていたこと、③戦後は沖縄在来馬ではなく、比較的大型の普段は農耕や運搬に用いていた馬を走らせていたこと（近年、また戦前は小さい「島馬」と呼ばれる馬の可能性あり）、④村民が食べ物を持って集まり、賑わいを見せる行事であったこと、などが挙げられる。

伊是名村は尚円王ゆかりの地であり、中国や首里との繋がりも深い島である。尚円王が側対歩の馬に乗る銅像があるなど、馬と人との関りも深く、競馬もかなり昔から行われていた可能性はあるが、今回の調査ではその歴史や起源を知る手掛かりを見つけることはできなかった。

◆伊是名島内での聞き取りの事前調査

○伊是名村教育委員会 教育振興課 大城 正泉 さん

- ・60歳以上の方々は実際に競馬を見聞きしていた。
 - ・開催時期は、旧暦の4月29日で、競馬はウマンツミーやマーウイ、ヤマンツミーと呼ばれる。
 - ※マーウイは馬追いの意味。ヤマンツミーは山への立入を禁じた日。呼称や意味が混ざっている可能性あり。
 - ・現在、島内で馬を飼育している場所はない。
 - ・各集落で競馬を行っていた。
- 仲田区、諸見区、勢理客区、伊是名区
- ※現在は、仲田区、諸見区、勢理客区、伊是名区、内花区の5集落あるが、内花区は諸見区から分かれた地域であるため、琉球競馬の情報は諸見区として聞き取り。
- ・各区の競馬で走行する距離に違いがある。
 - ・馬は農耕用として各家で飼育しており、競馬のために調練する人がいたかは不明。

◆伊是名島内での聞き取り調査

<仲田区>

○伊礼 正徳 さん（65歳）※礼はネ豊

- ・昭和47・48年ごろまで馬を見た記憶があるが、昭和50年以降、島内に馬はいない。約10年前に個人で馬を飼っていた人が勢理客区にいたのが島内最後の馬（飼い主：浜里 清二さん）。
- ・当時、馬は農作業で利用して、旧暦4月29日の時に競馬で使った。現在、馬はいないが、この日は馬の日として祈願する風習は残っている。マーウイは、島の行事として400～500年前から行っていたのではないかと思うが、正確にいつから始まったものなのかは不明。このような島の行事に関しては、うがみ

の人が取り仕切っていたが、今は後継者もない。

- ・競馬を行った場所は、現在の公民館前。当時は砂地で中央に草が生えていた。本番が近づくと、砂浜で練習を行っていた。
 - ・飼育していた馬は「ウチナーウマ」や「シマウマ」と呼ばれ、与那国馬や宮古馬とも異なる、沖縄島本島から購入した雑種だった。
 - ・競馬で走行する距離は100メートルほどで、3〜4頭が一斉にスタートし、速さを競った。荷鞍はあったが、乗馬用の鞍はない。競馬の時は、麻袋(カマジー？カマスー？)を背にかけて、裸馬で乗り、ムチも使用していた。
 - ・馬への合図：ハイ＝発進・進め、ドー＝止まれ、ヒアー＝力を入れろ・走れ(ヒアーは色々な声かけがあった)
 - ・基本的には飼い主が自分の馬に乗る。青年～大人が多かったが、騎手に決まりはない。
 - ・馬の蹄には蹄鉄をつけていた。蹄鉄は、各集落にパイプで組んだ杵場のようなものがあり、飼い主が自分たちで鉄を取り付けていたと思われる。(現在、杵場は残っていない)
 - ・マーウイの日は、祭りの様に賑わっていた。出店はなく、食べ物は持ち寄りだった。
- [その他、家畜に関して]
- ・家では、馬、牛、豚、鶏を飼育していた。
 - ・牛は、集落ごとに種付け用の雄牛が1〜2頭いて、繁殖を行っていた。種付け代は、お米などの物品で支払いをしていた。馬は島内で増やすというよりも、本島から仕入れていた。

○仲川 貞充 さん (62 歳) なか川館の主人

- ・アブシバレーで競馬を行っていた。家畜を休ませる日、感謝する日で、祭りとして行う。豊作祈願の1つとして始まったと思われる。弁当を持参し、集落内の人が集まる。裸馬に乗り、2頭が全速力で走る。競争は2〜3回行う。これらの行事は各集落で行われており、集落間での交流もあったと聞いている。優勝者に賞品等はなく、名前が島中に知られる。
 - ・競馬がある1週間前から近くの浜で練習していた。浜は、現在の仲田港(フェリー乗り場の所)で、今は埋め立てられているが、昔は一面砂浜だった。遊ぶときは、ほとんどこの場所だった。
 - ・伊是名島に在来系の馬は少なかった。与那国馬や宮古馬とも異なる馬だったと聞く。尚円王の馬に乗っている銅像の馬は、昔の馬の特徴を調べて作ったもの。詳細は版画家のボクネンさんが調べていたので、何か知っているかも。
 - ・伊是名島の馬は本島から買い求めていた。当時、輸送が難しかったこともあり、牛や馬は島内に種雄を所有して、その人のところで繁殖を行っていた。
- [その他、家畜に関して]
- ・牛よりも馬の方が多かった。豚などの家畜も木造の船(100 t ないくらいの大きさ)で運んだ。当時、伊是名港が主要の港だったが、地形の関係で接岸できなかった。そのため、先に数名が手漕ぎ船で陸に戻り、家畜は海に投げ入れる。家畜は浜に向かって泳ぐので、それを浜にいる人が受け取るという方法で、輸送をしていた。船の造りが木造から鉄製になると、耕運機が島内に入ってきた。昭和51年の沖縄復帰ごろ、船(スーター)で車が運べるようになると、牛や馬などの農耕で活躍してきた家畜たちが利用されなくなり、島内から姿を消した。
 - ・港をつくる石を山から港に運ぶ作業に、牛や馬を利用していた。当時は、誰が一番運べるかを皆で競争していた。

- ・人がご飯を食べる前に、家畜にエサを与えていた。家に帰ると宿題の前に草刈やエサやりをしていた。家畜は家を養うための動物なので、人よりも優先されていた。
- ・豚は正月ウチャーといい、正月だけ食べる貴重な食材だった。冷蔵庫(電気)が無い時代、木箱にに入れて保存し、一年かけて食べる。チーリチーも食べていた。3〜4世帯の大家族の家は、1頭だけでなく、2〜3頭は正月につぶしていたのでは？電気や冷蔵庫が普及すると、このような文化も無くなってきた。
- ・本島とは異なり、伊是名島と伊平屋島にはアヒルの食文化が根強く残っている。もとは中国の文化で、バリケンも食用として使用していた。尚円王由来で、首里の文化は直接伊是名(当時は伊平屋)に入ってきていた。アヒルは肉を食べると言うよりも、汁にして(クスイムン)いた。汁は、仏壇にも備える。アヒルの値段は、高価で山羊よりも高かった(2kg が5〜6千円)。

<諸見区>

○宮城 守 さん (80 歳?) 昭和 10 年生?

- ・牛よりも馬の方が飼育している人は多かった。農耕に使う場合でも、速さを重視しており、牛よりも馬を使用していた。
 - ・飼育していた馬はメスで、とても美しい馬だった。600 kg 程あり、赤黒い色で額と四肢先が白かった。終戦直後から 16 年間、家族 10 名を養ってくれていた。喜界島産の馬で、勢理客区で飼育されていたが、癖が酷く、放置されていたのを引き取ってきた。叩いて叱る必要がなく、話せばわかる賢い馬で、今でも夢に出てくる自慢の馬だった。名前を付けてはいなかった。馬は家族だった。
 - ・当時、馬は八重山や本島などから連れてきており、畑を耕したり、石を運搬する作業を馬がしていた。当時、守さん自身も、山から石を運搬しており、人力で 96 セント、馬がいれば(馬車を使えば) 3〜4 倍の収入を得ていた。とてもよく働いてくれる馬だった。エサは野草や米ぬか、イモなどを与えていた。堆肥も利用していた。
 - ・正確には覚えていないが、4 月末ごろに競馬をしていた。当時、諸見区は人口が一番多かった。競争場所は、幅 20 メートルの場所で、両側にマツの木が並んでいた。現在は、道幅も変わっており、松並木も存在しない。走っていたと思われる場所はサトウキビ畑になっている。
 - ・10 頭が一斉にスタートし、全速力で走り抜けて勝敗を決める。これを 3〜4 回繰り返す。観客が見ているため、特に審判はいなかった。優勝者に賞品などは無かったが、島中に名が知れ渡った。守さんの馬は速く、1 等になることが多かった。
 - ・鞍はなく、何もつけずに裸馬で乗っていた。馬に跨ると、手綱を片手に巻いて、鬣をつかみ、もう片方の手でムチを持って走らせていた。毎日扱っている馬なので、特に練習などはしていなかった。
 - ・ウマに乗る年齢に決まりは無かったが、落馬などの危険があるため子供は乗らず、青年〜大人が走らせていた。扱い慣れた人(飼主など)が騎乗していた。
 - ・競馬には村中の人が集まり、ご飯は持ち寄りだった。競争と競争の間にお弁当を食べるなど、何もない時代の人々にとっては大きな楽しみの 1 つだった。他集落から競馬にくることは無かった(当時、集落間は仲が悪かった様子)
 - ・競馬は、1957 年(昭和 32 年)ごろまで行っていたと思う。昭和 30 年頃が最盛期だったと思う。約 50 年前まで農作業で馬が活躍していたが、耕運機やトラクターが入ってきて、馬はいなくなった。
- [その他、家畜に関して]
- ・家では牛、馬、豚、鶏を飼っていた。子牛は 20 万円、双子だと 80 万円で売れた。
 - ・守さんが島内の牛のセリを行っていた。年に 3 回 36 回実施。今は、今帰仁に卸している。

○末吉 正子 さん (77 歳)

出身が伊是名区で、結婚後は勢理客区で生活

〔ウマンツミーに関して〕

- ・馬や牛は農耕用で使っており、島内には牛よりも馬の方が多かった。馬の方が力があるため、大きな馬車を引いており、牛は小さな荷車を引いていた。裕福な家は、馬を飼育しており、貧しい家は牛のみを飼育していた。
- ・ウマンツミーは、日ごろから農耕で活躍する(稼いでくれる)馬への感謝の気持ちから行われている行事である。労をねぎらう気持ちで行っていた。この日は馬の方が豪華な食事をしており、イモや大根、ニンジンなど、季節の野菜を与えていた。昭和 40 年ごろまでは行われており、機械の普及とともに家畜は手放していった。
- ・農耕用の馬は蹄鉄をつけていた。各集落に蹄鉄をつける場所があったが、今はもうない。当時の鍛冶屋が行っていたのではないかと。
- ・大きな馬の方が力があるため、馬車を引かせるために大きな馬を飼っていた。肢が長く、茶色で額に白色が入る馬もいた。今の競馬で出てくるような馬だった。当時、馬に名前を付ける習慣はなく、「ウマ」と呼んでいた。
- ・競馬がいつから行われているのかは不明。復帰前の馬車に偉い人を乗せた写真があるので、馬に偉い人を乗せる文化は昔からあったはず。

〔伊是名区について〕

- ・旧暦 4 月 29 日は拝みも行い、その後に競馬を行っていた。
- ・今の競馬のような全速力で走り、勝敗を決めていた。優勝者への賞品等はなかったが、名前が島中に名が知れ渡った。
- ・競馬を行う場所は、「馬追通り」と呼ばれている。
- ・伊是名区が最も距離が長く(約 400 m)、一番大きな大会だった。他集落からも馬を連れてきていた。競馬は東側から西側に向かって走った。これは、太陽の動きに合わせており、始まりは東からと決まっていた。3〜4 頭が同時に走った。
- ・馬には持ち主が騎乗し、年齢は様々だった。若い人が多かった印象がある。馬には鞍とかはのせず、裸馬で乗っていた。

〔勢理客区について〕

- ・勢理客区は神事が多く残っており、毎月何かしら拝みが行われている。
- ・競馬の距離は 100 ～ 200 m ほどで、10 年ほど前には、元教育委員長の浜里さんが飼っていた八重山の方の小さな馬(与那国馬?)を走らせていた。この馬はすでに死亡している。
- ・現在、馬はいないが、当時と同じ場所で、競馬のかわりに区の子どもが、かけっこや自転車などで競争を行っている。本来なら賞品等はないが、続けてもらうためにお菓子を配布している。当日は拝みが終わった後に放送を流し、子ども達を集めている。
- ・当時、競馬の応援は叫ぶような歓声で、決まった声かけは無かった。出店などはなかったが、祭りのような賑わいだった。

〔その他、家畜などに関して〕

- ・牛や馬は方言でなく、「ウシ」、「ウマ」と呼んでいた。豚は「ウー」や「シマウー」と呼ぶこともあった。
- ・昔の家で畜舎が残っている所は無い。壊しているか、倉庫に改良している。当時の写真も残っていない

し、写真機も無かったと思う。

- ・ウーパールはあったが、今はどこにも残っていない。
- ・清明祭で使うトリは必ず地鶏で、レグホーン種ではない。現在、豚と地鶏は高田さんから購入している。
- 魚は漁で採れなかった場合は、塩漬けにしたものを使用したとの記録もある。

○名嘉 哲治 さん (64 歳)

勢理客区で畑工作中に聞き取りをお願いした

- ・各家が農耕用の馬を持っていた。
- ・2 頭ずつが走り、全速力で走っていた。普段から扱ったり乗っていたりしたため、事前練習は行わなかった。
- ・与那国馬のような小柄な馬から大きな馬までいた。
- ・30 年以上前までは馬が走っていたが、今は人や自転車で走っている。地面は砂地だった。

○末吉 實好 さん (73 歳) 勢理客区で理髪店を経営、勢理客区区長

- ・家で馬は飼育していなかったが、他の人の馬に乗って競馬に出ていた。難しくなかったですか？→慣れていたのです。
- ・平成元年か平成7年頃（公民館ができた頃）まで馬が走っていたと思う。
- ・競馬は裸馬で乗っていた。3 頭並んでスタート地点に立っている様子を撮影した写真が公民館に飾られている。
- ・与那国馬のような小柄な馬から大きな馬まで、大きさは様々だった。大きな馬が多かったが、徐々に小さな馬に変わっていった。
- ・ヤマンツミーの山に入っはいけない日に行く。農家の人が馬に乗っており、飼い主がいけない場合は他の人が乗る。昔は他集落からも来ていたが、今は各集落ごとに行っている。100 年以上の歴史があると思うが、いつから行っている行事かは不明。
- ・同席していた中1のお孫さんも、今は自転車で年に1度公民館前を走っている。昔はこれが馬で行われていたことは聞いて知っている。



伊是名島の勢理客地区の馬場跡



伊是名島の諸見地区の馬場跡



伊是名島の伊是名地区の馬場跡



伊是名島の仲田地区の馬場跡

第5章 沖縄島における琉球競馬の聞き取り調査

佐藤 寛之・金尾 由恵

沖縄こどもの国の元園長である仲宗根喜栄さんが、2023年1月に開催した第18回琉球競馬シマハラシーに関する新聞記事をご覧になり、ご自身も小さい頃に競馬を見たことがあるということでお話しをしてくださった。聞き取りは2023年2月12日におこなった。この章では、仲宗根さんからの聞き取り内容を記す。

◆仲宗根さんについて

昭和6年10月18日生

- ・南大東生まれで3男、1歳の時、小学生の長男が脳膜炎にかかり父の出身地の嘉手納の病院に入ることとなり家族ごと嘉手納に引っ越し。
- ・嘉手納で小学校を過ごした後、戦局の悪化で疎開、縁故疎開ということで内地の知り合いの家に疎開。
- ・ムートゥヤー（元家、本家、長男）は那覇首里の平良、次男は今帰仁、三男は豊見城にいた。終戦後、嘉手納に戻る。

◆琉球競馬について

- ・嘉手納の小学校時 旧屋良小学校の正門前にあった直線が馬場であった。シマイーと呼ばれていた。（現在は嘉手納基地内）今帰仁の仲原馬場のようであった。
- ・左右の土手に大径木のリュウキュウマツが並木となっていた。傷のあった根のあたりから松脂（トウブシ）が取れた。家での焚き付け用に喜ばれた。
- ・沖縄こどもの国の裏手の島袋集落の住宅地もシマイーだった。
- ・体育をしたり、あそび場だった馬場だが、よくそこで馬の練習をしている大人たちを見ていた記憶がある。（側対歩）足さばきの練習を何度もしていたような気がする。宮古馬だったと思う与那国馬はもっと小柄だと思う。
- ・競馬には宮古馬や与那国馬以外は見た記憶がない。
- ・馬主はお金持ち、集落でも裕福な家が所有していた。
- ・園長時代、金城キクさんからこどもの国にシマハラシーの馬具を寄贈してもらった。
1975年前後くらい（沖縄市立郷土博物館に所蔵している可能性が高い）
- ・小6のころ競馬をやっているのを見たが印象に残っているのは、乗り手よりも様々な装飾を施された馬がきれいだった。
- ・シージャ馬（シージ：煤すすから来た？煤色）が灰色がかってかっこよかった。
- ・あぶみは木製でスリッパ型、きれいに彩色されていた。
- ・昭和19、18年くらいまではやっていたと思う。
- ・乗り手は男だけで女の乗り手は見たことがない。そういう時代だったと思う。
- ・馬主は金持ちだった集落の大きな屋敷には牛小屋と馬小屋があった。
- ・当日は屋台が出て、ミカンとかバナナとか売っていた。水飴、とか玩具（風車など）もあった。
- ・頭数は覚えていないが1日かかりのイベントであったと記憶している。
- ・勝負は誇りをかけていたと思う。屋良部落のなかの馬が4、5頭いたがその中でも競っていた。

◆その他、在来家畜に関して

- ・家には馬車馬を飼っていた。雑種で在来馬よりでかい馬だった。
- ・当時の馬車道は轍がひどく大型の馬でないときつかったのかもしれない。
- ・親父が馬車スンチャー（馬車ムッチャー、馬車曳き）だった。
- ・仕事終わりで裸馬に乗って比謝川まで行くと川に入って水の中で馬に乗った。
- ・当時馬に乗るのは規則で禁止だった。田舎では乗ってたかもしれないが。
- ・当時の馬は勝手に家に帰れたので、馬曳が酔っ払って寝てしまっても勝手に家についていた。
- ・祖母は字東（あざひがし）に住んでいたがそこには牛小屋馬小屋があった。牛を飼っていた。
- ・字東部落でのイベントとして覚えているのは、集落の中に東屋的な集会場があって、そこがアシビナー（遊び庭）でアブシバレー（畔払い）のときには素人芝居のようなものが上演されて、大人は酒飲んだりしてた。シマハラシーはアブシバレーの時期ではなかったと思うがわからない。綱引きの時期かもしれない。
- ・闘牛も人気だった。
- ・闘牛は北谷の砂辺が盛んだったが、親に連れられて読谷の方にも見にいった記憶がある。
- ・家には馬車馬のほか、ウサギ、ニワトリ、ヤギがいた。自分用に闘鶏タウチーを飼っていた。
- ・タウチーオーラセー（闘鶏）が盛んだった。
- ・キノボリトカゲ（アタクー、マッタクー）も喧嘩させて遊んだ。弱ったらもんだヨモギをかがせていた。
- ・ガジュマルの汁を集めて、鳥もちにして、トンボをとって鶏のエサにもした。
- ・食用ちんなん（アフリカマイマイ）、ハルチンナン（畑のカタツムリ、オキナワウスカワマイマイ）も捕まえて食べた。
- ・馬車起動がサトウキビを運んでいるのを後ろから近付いてキビをとったり、サーター樽の倉庫に忍び込んで黒砂糖を失敬したりして遊んだ。
- ・嘉手納の橋の上から比謝川に飛び込めると一人前とされ、よく川で泳いだり飛び込んだりして遊んだ。
- ・嘉手納はターミナルで栄えていたのでソバ屋がたくさんあったりした。アイスクリーム屋があって当時何よりうれしいごちそうだった。
- ・軽便鉄道は客車3両編成くらいだった。すごく遅くて那覇まで2時間くらいかかったと思う。サーター樽を運んだりもしてた。
- ・サーター屋と呼ばれる場所が各集落くらいにあって、収穫時期になると馬がサーター車を引きまわしていた。左目に覆いをしてた。

第6章 琉球競馬シマハラシーオンラインシンポジウム開催

金尾 由恵

オンラインシンポジウムでは、地域の歴史や文化を人ともに作り上げてきた「在来家畜」について、そして在来家畜のひとつ「ウマ」が関わってきた一大イベントである「琉球競馬」という文化をテーマに、有識者の方々に基調講演をしていただいた。そして、どうして伝えないといけないのか、どうして未来へ引き継いでいかないといけないのか、どうしたら引き継いでいくことができるのかをパネリストの皆さまと将来の方向性を議論する機会となった。なお、配信した動画はアーカイブし、引き続きご視聴いただけるようになっている。

◆開催概要

開催日：2023年1月21日(土)13:00~16:30

会場：オンラインライブ配信 (Youtube 沖縄こどもの国チャンネルにて配信)

配信時の視聴者数：29名

※視聴回数：823回 (2023年3月15日時点)

動画URL：https://www.youtube.com/live/6_V7teQ4jU8?feature=share



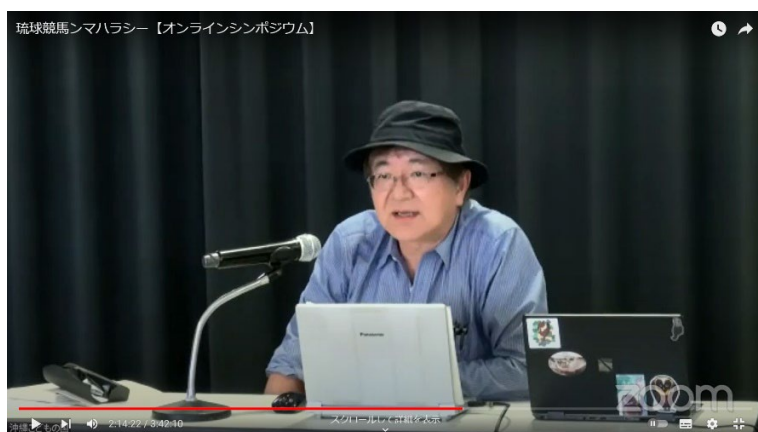
シンポジウム動画URL

◆開催内容

開催挨拶	金尾 由恵 (沖縄こどもの国)
基調講演①	「琉球弧の在来家畜」 高田 勝 (有限会社今帰仁アグー代表・沖縄こどもの国前園長)
基調講演②	「琉球競馬とは？」 梅崎 晴光 (スポーツニッポン新聞社・「消えた琉球競馬」著者)
パネルディスカッション	琉球競馬シマハラシーを通して、在来家畜をどのように保存していくか 《パネリスト》 高田 勝 梅崎 晴光 中川 美和子 (ヨナグニウマ保護活用協会理事) 比嘉 源和 (沖縄こどもの国相談役・元園長) 花城 康貴 (沖縄市観光物産振興協会事務局次長)



基調講演① 琉球弧の在来家畜（高田勝氏）



基調講演② 琉球競馬とは？（梅崎晴光氏）



パネルディスカッション

第7章 第18回琉球競馬ンマハラシー競技大会開催

金尾 由恵・友利 和也

第7章では、第18回琉球競馬ンマハラシー競技大会の実施報告を行う。競技大会の開催により、沖縄県民のみならず、県外・海外から足を運んでくださる来園者へ発信することで、多くの方々に沖縄の伝統文化への興味・関心を促し、在来馬をはじめとする在来家畜への親しみをもっていただくことを目的とした。また、来園者が体験しながら遊び・学べるイベントとしたため、体験ブースの出展や、来園者が参加できる優勝馬予想や乗馬体験等も実施した。

◆開催概要

開催日：2023年1月22日(日)

出展団体：12団体

競技大会出場団体：5団体17頭 ※1団体のみ出場馬以外に乗馬体験用を1頭連れてきていた。

入園者数：3,238名

《第18回琉球競馬ンマハラシー出場団体名簿》

	馬名	性別	騎手名	馬の種類	出場団体名
1	カンタ	セン	大江倫子	与那国馬	うみかぜホースファーム
2	バライ	セン	三石千颯	与那国馬	うみかぜホースファーム
3	ルンタ	セン	並里泰乃進	与那国馬	うみかぜホースファーム
4	秋華	♀	岩谷早良	与那国馬	うみかぜホースファーム
5	モキチ	セン	大城美野	与那国馬	うみかぜホースファーム
6	サンゴ	♀	おくのふうし	与那国馬	うみかぜホースファーム
7	ティグミ	♀	呉妃如	与那国馬	東南植物楽園
8	シナモン	♀	デスティニー	ポニー	ホースガーデンちゅらん
9	プリンス	セン	下村むげん	ポニー	ホースガーデンちゅらん
10	ウルム	♀	藤井菜摘	与那国馬	久米島馬牧場
11	ハイビ〜	♀	富田緩杜	与那国馬	久米島馬牧場
12	イース	セン	廣澤壱汰	与那国馬雑種	久米島馬牧場
13	オビ	セン	三ツ岩森之	与那国馬と岬馬の雑種	久米島馬牧場
14	ダイ	セン	小川陽翔	与那国馬	久米島馬牧場
15	なびい	♀	渡邊百優	与那国馬	沖縄こどもの国
16	どうなん	セン	平尾優昂	与那国馬	沖縄こどもの国
17	なぐに	セン	上江洲かな	与那国馬	沖縄こどもの国

《その他、体験プログラムなど》

出展ブースによる体験プログラム（琉球紅型、草あみ、ハンズオンの馬具など）

竹ンマハラシー

勝馬投票券配布

紅白旗配布

乗馬体験

※プログラムの詳細については、巻末に付録として掲載した第 18 回琉球競馬シマハラシーのパンフレットを参照。

◆審査方法について

琉球競馬の審査方法について、ここでの審査は「シマスーブ」として走りの美しさを競っていた競技大会についてだが、戦前おこなわれていた際も、審査結果に対して言い争う場面があったようだ。本園で過去に開催してきた大会においても、審査方法は来園者に分かりづらく、競技参加者からも意見が出ることがあった。

今回の大会では、競技大会の審査方法が来園者にわかりやすく伝わることを念頭に、審査方法を記したパンフレットの配布をはじめ、大会中に審査員と司会より、来園者に向けてのアナウンスを幾度もおこなった。また、本大会では初めて、来園者に紅白の旗を配布し、審査に参加していただいた。

審査ではウマと競技者の一体感や足の運びの優美さをポイントとするため、「スピード感」「リズム」「歩幅」「真直性（ぶれずにまっすぐ進んでいるか）」に加えて、ウマと競技者双方の着飾り「ビジュアル」も審査ポイントとした。以上、5 項目について 4 人の審査員が審査をおこなった。さらに、来園者も審査員の 1 人とし、事前に配布した紅白の旗の数で司会が判定した。なお、駆足（カキバイ）が出た場合は、減点対象とした。

《第 18 回琉球競馬シマハラシー審査員》

- ①花城 薫（沖縄県馬術連盟 理事長）
- ②岡部 幸雄（元 JRA ジョッキー）
- ③小那覇 安剛（琉球新報社 論説委員長・紙面審査委員長）
- ④當間 嗣平

◆第 18 回琉球競馬シマハラシー競技結果

○優勝

シナモン（騎手：ディステニー・デズモア）[ホースガーデンちゅらん]



○準優勝

なびい（騎手：渡邊 百優）〔沖縄こどもの国〕



○第3位

なぐに（騎手：上江洲 かな）〔沖縄こどもの国〕



○美らかーぎー賞

サンゴ（騎手：おくのふうし）〔うみかぜホースファーム〕

オビ（騎手：三ツ岩森之）〔久米島馬牧場〕

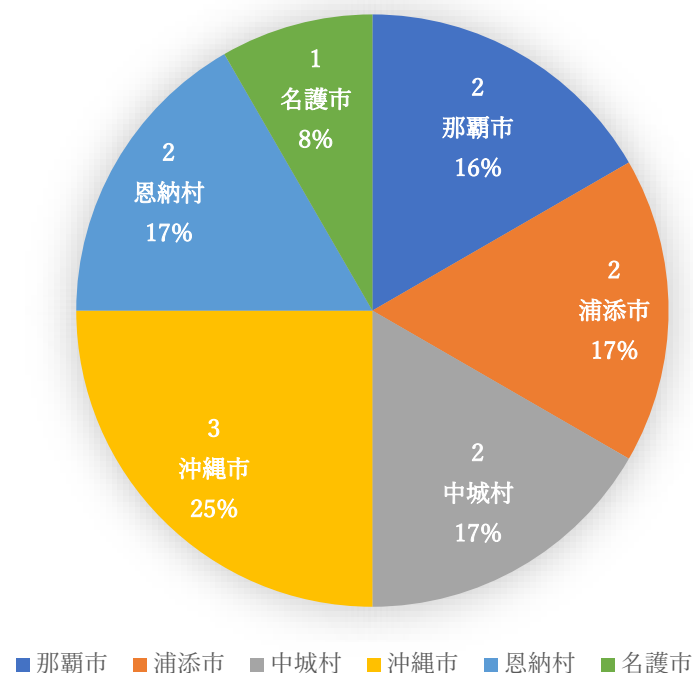
◆来園者アンケート

第18回琉球競馬シマハラシーの競技大会に来場した人向けに、アンケートを実施した。アンケートは、競技大会の最後におこなった勝馬投票券の当選発表とプレゼント引き換えの際に、アンケート用紙を来園者にお渡しし、記入していただいた。アンケートの回収数は15件であった。

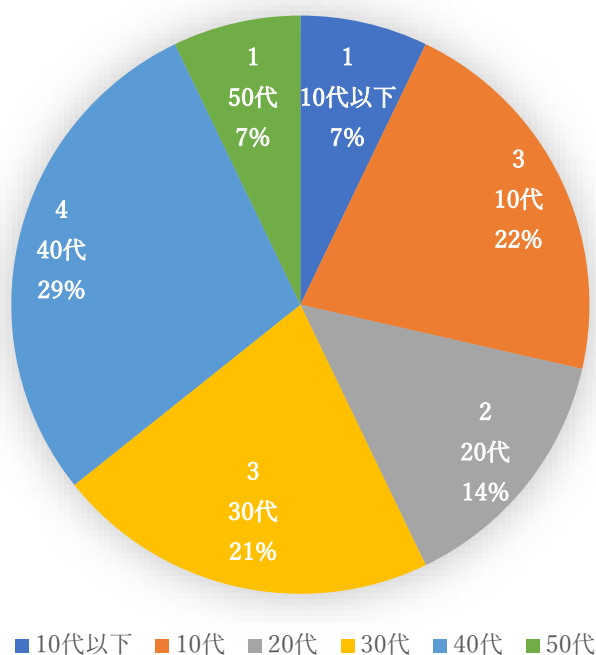
アンケート結果を以下に記した。今回の大会では、質問1の結果より、来園者は沖縄県内のみであったと考えられる。しかし、オンラインシンポジウムや本大会を広報したSNS記事でのコメントでは、「イベント告知が早めにおこなわれれば参加したい」というコメントが多数あった。今回はイベント告知が、12月となったが、県外、海外からの集客も考える際にはできる限り早い時期での告知が必要であり、来年度は5月頃より告知をおこなう予定である。

イベントにおとずれたきっかけは、「馬が好き」「沖縄こどもの国が好き」「楽しそうだったから」「興味があった」などと非常に多様なものであり、馬や沖縄の文化について興味がある人たちだけではなく、また、イベント自体の満足度は非常に高く、質問7の印象に残ったことについては、馬について、馬の衣装について、琉球競馬についてなど、琉球競馬シマハラシーに関する具体的な記述がみられた。イベント全体に対する来園者の評価は高く、今後の開催を望む声も複数あげられていた。

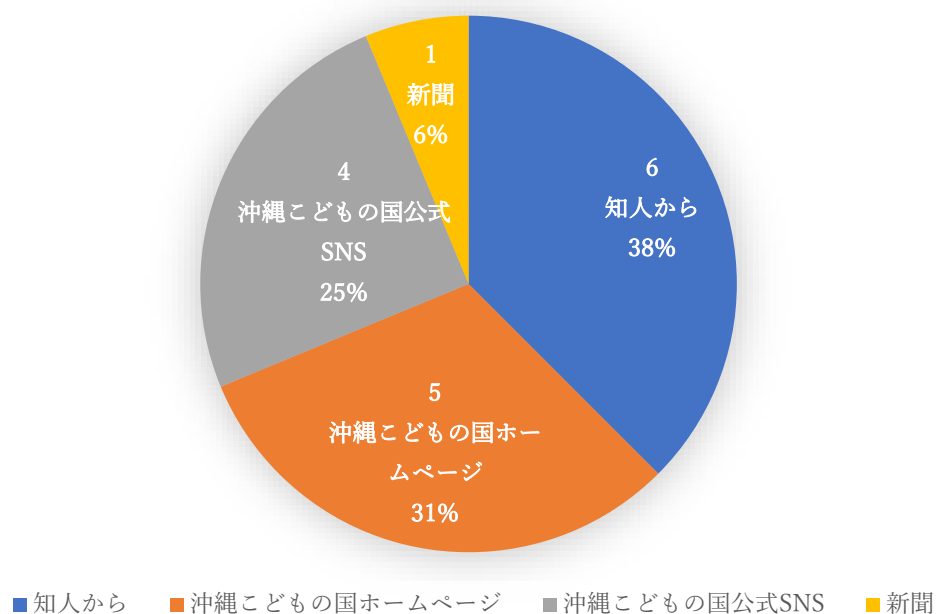
質問1. どこから来ましたか？ すべて沖縄県内より来園。



質問2. 何歳ですか？



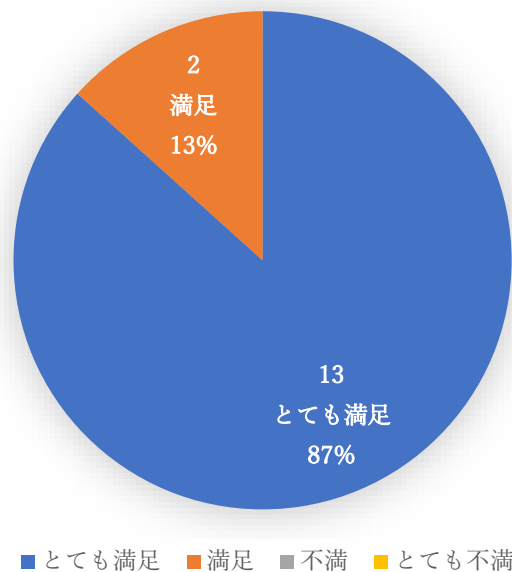
質問3. このイベントを何で知りましたか？



質問4. 来園のきっかけは何ですか？

- ・ 出店
- ・ 子どもが馬が好きで、このイベントがあると伝えたら行きたいと言ったので。
- ・ HP 見て楽しそうだったから。
- ・ 1度は見てみてみたかった
- ・ こどもの国が好きなので
- ・ きょうみがあったから

質問5. イベントの満足度はいかがでしたか？



質問6. イベントで一番印象に残ったのは何ですか？

- ・馬のいしょうとてもきれいで、きょうぎも初めてみたがとても楽しめました
- ・はしり手と馬の息があっていた。かつこよかったです！
- ・キンパツ
- ・なびい2位なったこと
- ・3位までウマもりもらえたこと。馬どしで、とてもほしくて、なびいを応援していて、さいごでもらえるとわかり本当に本当にうれしー♡
- ・なびい対なぐに。なぐにに投票したので。
- ・馬の走るスピードだけではなく、走るうつくしき等、競技の奥深さを知ったことです。
- ・琉球競馬の開始のタイミングがハラハラし印象に残っている
- ・大きが違う馬がいっぱい見れて良かった。
- ・子どものえらんだシナモンが優勝しました！
- ・すべて。初めてみたので
- ・美しい馬の走り

質問7. その他ご意見・ご感想があればご記入ください。

- ・また、来年も来たいです。
- ・また来ます
- ・とてもおもしろい
- ・とても？おちこんでいた私ですが、このシマモリもらえてとってもとってもHAPPY もう少し人生がんばってみようと本気でおもえました。ありがとうございます。
- ・小さい子も参加できる競技があるのもっと楽しめると思うのでご検討よろしく願いいたします。
- ・県内市町村にスポットを当てて紹介があると面白いと思いました（宜野湾村や名護etc）
- ・ありがとうございます

- ・また来たいです。
- ・毎年やってほしい。次回は米馬に勝ってほしい。

◆琉球競馬ンマハラシーの普及映像について

今回の競技大会を撮影し、琉球競馬ンマハラシーを普及するための映像を作成した。

動画 URL : <https://youtu.be/Pni8DX3X0tE>



琉球競馬ンマハラシー動画 URL



第 18 回琉球競馬ンマハラシー会場：沖縄こどもの国水とみどりの広場



第18回琉球競馬ンマハラシー出場馬紹介



出走時の様子



競技中の様子



競技大会の審査



来園者による紅白旗による審査



来園者体験プログラム：乗馬体験



来園者体験イベント：竹ンマハラシー

第8章 在来馬の活用に関する琉球競馬ンマハラシーの課題と展望

金尾 由恵

沖縄こどもの国では令和5年の1月に3年ぶりにコロナ禍で途絶えていた琉球競馬ンマハラシーを再開することができた。今回の再開は当園だけでは実現は難しく、関係者の協力なしには実現しなかったであろう。あらためて感謝するとともに実施にあたって見えてきた課題と今後の展望について、イベント、観客、歴史的背景の分野に分けて少しまとめてみたい。

コロナ禍後のたった3か年で競技大会を再開したことは、比較的短い期間であったようにも思われるが、習慣になっていたイベントを一旦休止してしまうことで、当園の体制だけでなく参加団体など競技大会に関わる各機関、人々の事情など、再開までのコストは連絡体制の再構築という点だけでもかなり高くなることが明らかになった。特に沖縄県は島で構成されている以上、島間での動物の移動を伴うため、こうした事前調整も必須である。これらのことから、いかに途切れることなく、かつどこかの事業者、個人にのみ負担が集中しないようにする仕組みの構築、担当者がかかわっても企画が進行できるような体制づくりなどが課題として認められた。

また今回の競技大会では5団体17頭の参加があり、ンマハラシーの復活以来、少し出場頭数が減少した結果となった。継続的に実施するという目的のためには、継承、代替わり、新規参入といった参加団体の拡充も課題として見えてきている。とくにこの競馬を広く県民に認識してもらい、在来馬飼育のすそ野を広げる意味でも、今後馬を所有している個人・団体の発掘と新たな馬主の開拓も関係機関と協力、調整しながら検討していきたいと考えている

今回の再開にあたっては、幸いなことに令和4年度 Innovate MUSEUM 事業による資金を得ることができたこともあり、競技大会でのパンフレットの配布、琉球競馬ンマハラシー普及のための動画作成といった広報にも予算を振り分け、活動することができた。肌感覚ではあるものの、こうした広報を通じて得られた琉球競馬に対する県民の認知度は「この地に競馬があったことすら初めて知りました」といったものが多く、広報の効果は高まったと思う反面、一度長期間にわたって失われてしまった競馬の存在を、かつての全沖縄的な熱狂競技まで昇華することには、まだまだ多くの課題があることを認識させられた。当事を知る方々の高齢化などから、すでにこのような知識の伝承が難しい。そこで、沖縄こどもの国という施設の強みを活かした伝承への新たなアプローチを実施していくことを検討したいと思う。具体的には子ども達にむけた在来馬や琉球競馬を学ぶワークショップや講座などを行うとともに、広く普及啓発するための琉球競馬ンマハラシーの絵本の作成・配布などを目指したい。

また新しい取り組みとして第18回琉球競馬ンマハラシー競技大会に先立ち、オンライン上で「琉球競馬ンマハラシーオンラインシンポジウム」を開催した。本園では初めてオンラインシンポジウムを開催し、県内だけではなく、県外から参加してもらうことができ、琉球競馬ンマハラシーについて幅広い地域の方々に知ってもらうことができた。こうした地域を超えて発信できるメディアの活用は、その情報を映像媒体として保存、鑑賞することもできるためオンラインならではの利点を活かすことができた。今後は、これまでの調査結果報告もおこない、伝統文化を普及するために観光資源としていかに活かすことができるかをさらに考えていきたい。

2013年に復活にこぎつけた琉球競馬ンマハラシーであるが、その際には戦前の琉球競馬を経験したことがある人材が若干残っていたことが、その全貌を理解するのに大変大きな力となった。この琉球競馬というイベントはかつて庶民の大変大きな娯楽であったとされる一方、その詳細についての文献的資料は少な

く、一旦途絶えた行事であり、その当時の様子を知る人も高齢となっている。特に経験者からの体験談的な情報を収集するタイムリミットは迫ってきている。この辺の情報収集は今後もホームページや園内のサインなどで呼びかけを行い、機動的に聞き取り調査を実施するとともに、離島などの直接の戦火を免れた地域、戦後もンマハラシーを開催していた地域や馬産地などに引き続き直接出向いて情報の収集を行い、その結果を後世に残せるようまとめていきたい。

沖縄こどもの国では在来家畜を地域の文化的資源としてとらえ、琉球弧の自然・文化を伝える動物園として、今後もその普及啓発、保全に力を入れていく。その一つの柱としてかつての琉王国の経営を支えた主要輸出品目であり、庶民に長い間熱狂的に支持されてきた「馬」をとりまく文化である「琉球競馬ンマハラシー」を今後もできる限り開催継続し、少しずつではあるがその規模や内容の充実を図っていきたいと考えている。

●コラム 在来馬の保存と展望

佐藤 寛之

ある地域に分布している野生動物であれば集団間や集団内で互いに交配を行うことで次世代が生まれていきます。この際、遺伝的に近縁な個体同士での近親交配とよばれる交配が続くと遺伝的な劣化が起こり、病気や奇形の個体が生じたり、長期的には集団の消滅や種の絶滅といったリスクが高まることが知られています。通常は異なる集団間を若い個体が移動するなど、近親交配にさせないような仕組みが存在しています。在来家畜に関しても同様に近親交配が重なると遺伝的な劣化が生じるリスクがあります。在来家畜を「個体」ではなく「集団」として今後も長く維持するためにはこうした遺伝的な近交を防ぐ取り組みが必須となります。こうした家畜は人が繁殖を管理している以上、繁殖可能な飼育個体の頭数がある程度存在しないといけないのですが、農業機械が家畜の仕事を代替するようになり、ペットとして飼育するような生き物でもないため飼育頭数、生息頭数は横ばいか微減という状態が現状です。どのくらいの数がいれば安泰か？というのは一概にいけない一方で、現状が持続的な集団の維持には不安があるのも明らかです。こうした在来馬の馬主が増えるような仕組みや在来馬の新たな活用方法を模索することが喫緊の課題といえるでしょう。

執筆者一覧（50 音順）

金尾 由恵（公益財団法人沖縄こどもの国）
佐次田 隆弘（公益財団法人沖縄こどもの国）
佐藤 寛之（沖縄大学非常勤講師、沖縄生物倶楽部）
島田 晴加（公益財団法人沖縄こどもの国）
友利 和也（公益財団法人沖縄こどもの国）
三輪 千恵子（公益財団法人沖縄こどもの国）

謝辞

本事業は、文化庁の令和4年度 Innovate MUSEUM 事業の補助を受け、実施した。

第18回琉球競馬ンマハラシー競技大会およびオンラインシンポジウム開催にあたり、以下の方々、団体にご協力いただいた。

今野 直人さん（全国乗馬倶楽部振興協会）
梅崎 晴光さん（スポーツニッポン新聞社）
喜瀬 涼子さん（沖縄観光コンベンションビューロー）
高田 勝さん（有限会社今帰仁アグー代表）
渡久山 環さん（沖縄市観光物産振興協会）
中川 美和子さん（ヨナグニウマ保護活用協会）
花城 薫さん（沖縄県馬術連盟）
岡部 幸雄さん
當間 嗣平さん
小那覇 安剛さん（琉球新報社）
花城 康貴さん（沖縄市観光物産振興協会）
一般社団法人ヨナグニウマ保護活用協会
うみかぜホースファーム
沖縄市観光物産振興協会
沖縄市立郷土博物館
沖縄県博物館協会
沖縄県馬術連盟
沖縄県立博物館・美術館
久米島馬牧場
公益社団法人全国乗馬倶楽部振興協会
公益社団法人日本動物園水族館協会
東南植物楽園 美らヤシパークオキナワ
ホースガーデンちゅらん

琉球新報社

聞き取り調査では、以下の団体には、話者の方々のご紹介にご尽力いただいた。

宮古島 宮古島市教育委員会

荷川取牧場

伊是名島 伊是名村教育委員会

聞き取り調査では、以下の話者の方々に時間を取っていただき、貴重なお話を伺うことができた。

宮古島 長濱 幸男さん（宮古島市史編さん委員会）

荷川取 エミさん（荷川取牧場）

久貝 春陽さん（宮古島市教育委員会）

伊是名島 大城 正泉さん（伊是名村教育委員会）

伊礼 正徳さん

仲川 貞充さん

宮城 守さん

末吉 正子さん

名嘉 哲治さん

末吉 實好さん

沖縄島 仲宗根 喜栄さん（沖縄こどもの国元園長）

付録（第18回競技大会パンフレット）

沖縄こどもの国

第十八回琉球競馬

人馬とともに美しく走る

2023年1月22日(日)

11:00 ~ 16:00

文化庁
Agency for Cultural Affairs, Government of Japan

令和4年度博物館機能強化推進事業 (Innovate MUSEUM 事業)

主催：公益財団法人 沖縄こどもの国
共催：琉球新報社・沖縄県馬術連盟
後援：沖縄県博物館協会・全国乗馬倶楽部振興協会・日本動物園水族館協会

What is "N" maharashi" (Ryukyu horse racing)?

琉球王朝時代から戦前までの約300年間、沖縄には「ンマラシー」(地方によって「ンマヌーブ」、
 「ンマスリヤ」など)と呼ばれる競馬が行われていました。庶民にも人気であったンマラシーは、
 かつて沖縄に「薩島を含めて200以上もあった馬場、アブシハー」など地域の農業行事の際などに開催され、お店もあわせて大変な賑わいを見せました。

地味によって足力疾走で選考された馬は、それだけではなく、速さはもちろん、足並みの美しさを競うという、世界にも類を見ないスタイルでの競馬が行われていたのです。

ノーマンジーで活躍していた沖端の在来馬（沖端にもといた馬）は、馬としては小柄ですが力持ちで、ぶたは荷物を運んだサウトキを絞る作業を担っていました。しかし、戦争が始まると、馬たちは軍馬として活用されるようになり、さらに戦後の自動車の普及や農業の機械化など社会の大きな変化によって、在来馬の数は少なくなっています。ノーマンジーも、沖端本馬では1943年、那覇市西里町の平良真地で行われたのを最後に途絶えてしまいました。

沖繩（おきなわ）の国（くに）は、在来馬（ざいらいば）を含（こ）めた在来家畜（ざいらいけいしゆ）の保存（ぼぜん）にも力（ちから）を入（い）れています。そして、2013年（ねん）、地域の（ちゆうぎ）方々（かたがた）と連携（れんけい）、じつに70年（ねん）ぶりにンマハシ（んまはし）ーを復活（ふくわつ）させました。



大下初期、仲原馬場での館馬（「望郷沖線」）

Nimharashi is a traditional style of horse-racing in Okinawa which existed around 300 years, from the days of Ryukyu Dynasty, to pre-WWII. This type of horse-racing was very unique, in which the horses are judged not only by their speed, but also for their beauty of pacing.

This relationship between humans and horses drastically changed through the war, and the economic development which followed after. The Okinawan native horses were originally very small, but had enough endurance to carry around people, luggage and stocks, and help squeeze juice out of sugarcanes. However, the number of horses declined when people began using horses for military purposes during the war. The development of transport, and logistic technologies, also lead to the decline of these horses. Thus, accordingly to the diminish of the number of the horses, this unique culture of N'maharashi was totally lost from this island after the final competition in Naha City.

Okinawa Zoo and Museum has been playing an important role in restoring native livestock animals including the horses with the cooperation of local people. Finally, for the first time in 70 years, we succeeded in the revival of N'maharashi in 2013.

-2-

みなさん さんも審査員！

シンマハラシー 審査の基準

Judgement Standards for "N" maharashi" - You get to be a judge!

ハンマハラシーでは、「馬と乗り手の一体感」や「馬の足運びの優美さ」をポイントとしています。

1. 「スピード感」 Are they over-speeding?

※ただし、馬のいちばん速い走り方「はな駆け出しかた駆足」をしたらダメ！

"Gallop" or "Cantering", which are considered the fastest ways of running will not be considered 'qualified'.

2. 「リズムム」 Are they rhythmic?



っかばっか
Trotting

はからん!はからん!はからん!
Cantering / Galloping

3. 「まっすぐ進んでいるか」 Are they running straight?

4. 「馬と乗り手のビジュアル」

美しく着飾っているか？
Do both the riders and their horses look beautiful and unite?

④ 今大会では、4名の審査員に加えて、観覧している皆さんも審査に参加していただけます。

走りが綺麗だと思った方」の馬の色旗（白または赤）を揚げてください。

あ さんが揚げた旗の、多い方の色の競技者に1点^{てん}が加算^{かさん}されます。

査員4名からの各1点と、皆さんからの1点、

とうけい しょうはい ぎ
の合計で勝敗が決まります。

Today we have 4 judges on stage, each with 1 voting point. There will also be 1 point from the audience! Please raise your flag; red or white for the one you think were better at the above 4 standards. When the majority will earn a point.

希望の色紙は、「**総合案内**」(場所)本冊子裏表紙にて配布します。
数量限定となりますので、希望の方は早めに総合案内にお越しください!

You can get the judging flags at the General Information (see the map on the back cover).

The number of flags are limited, so come and get them quick!

-3-

しゅつぞう よてい うま しゅつじょうだんたい しょうかい 出走予定の馬と出場団体の紹介 Introduction of the Horses and Participating Organizations

今日の馬の体調などによって、出走しない、または別の馬に変更となる場合があります。
This list is subject to change due to health reasons.

※牝馬はメス馬、セン馬は去勢して子どもを残せないオス馬のこと
**"Gelding" is a castrated male horse. "Ware" is a female horse.

カンタ
Kanta

所属：うみかぜホースファーム Umikaze Horsefarm
性別：セン馬 Gelding

バライ
Barai

所属：うみかぜホースファーム Umikaze Horsefarm
性別：セン馬 Gelding

レンタ
Runta

所属：うみかぜホースファーム Umikaze Horsefarm
性別：セン馬 Gelding

秋華 (シュウカ)
Shuka

所属：うみかぜホースファーム Umikaze Horsefarm
性別：牝馬

モキチ
Mokichi

所属：うみかぜホースファーム Umikaze Horsefarm
性別：セン馬 Gelding

サンゴ
Sango

所属：うみかぜホースファーム Umikaze Horsefarm
性別：牝馬

うみかぜホースファーム
Umikaze Horsefarm

南城市にある、ヨナグニウマの牧場です。12月末に、ご近所のホテルにお引越ししました。ホテル常駐のヨナグニウマ親善大使として、ホテルを訪れるお客様をゼーくんぶヨナグニウマ好きにする、という夢をもって活動しています！



- 4 -

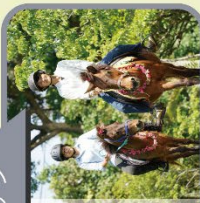
ティグミ
Tigumi

所属：東南植物楽園 Southeast Botanical Gardens
性別：牝馬



東南植物楽園 美らやんパークオキナワ
Southeast Botanical Gardens

東南植物楽園では、4頭のヨナグニウマが暮らしています。県内最大級の蓮池の周りを乗馬したり、ハチバブの木を眺めながら馬と触れ合ったり、植物園ならではの景観の中、ヨナグニウマと園内を自由に散歩することが出来ます。小さなお子さんは、ヨナグニウマのキッズカートでお散歩するのも楽しいですよ。ぜひ、東南植物楽園のヨナグニウマに会いに来て下さいね。



シナモン
Cinnamon

所属：ホースガーデンちゅらん Horse Garden Churan
性別：牝馬



プリンス
Prince

所属：ホースガーデンちゅらん Horse Garden Churan
性別：セン馬 Gelding



ホースガーデンちゅらん
Horse Garden Churan

当牧場は、競馬を引退した馬たち、高齢で引退した乗馬、虐待や飼育放棄より保護した馬たちをはじめ、繁殖が終わったヤギや捨てられた馬、犬、猫、ウサギなど、色々な動物たちが穏やかに暮らしています。一面でも多くを教わりたい一円で日々活動しています。ぜひ応援よろしくお願い致します。



- 5 -

出走予定の馬と出場団体の紹介 つづき

※牝馬はメス馬、セン馬は去勢して子どもを産めないオス馬のこと
 * "Gelding" is a castrated male horse. "Mare" is a female horse.

ウルム
 Urumu

所属：久米島馬牧場 Kumejima Uma Bokujo
 性別：牝馬

ハイビ
 Haibie

所属：久米島馬牧場 Kumejima Uma Bokujo
 性別：牝馬

オビ
 Obi

所属：久米島馬牧場 Kumejima Uma Bokujo
 性別：セン馬 Gelding

イース
 Isu

所属：久米島馬牧場 Kumejima Uma Bokujo
 性別：セン馬 Gelding

ダイ
 Dai

所属：久米島馬牧場 Kumejima Uma Bokujo
 性別：セン馬 Gelding

久米島馬牧場
 Kumejima Uma Bokujo

沖縄本島より西へ約100kmの距離にある離島、久米島で在来馬を中心とした馬20頭が暮らす牧場です。
 かつては一家に一頭は馬がいた馬ですが、戦後は徐々に姿を消し、わずか2頭だけ残った馬たちと牧場を始めて今年で10年になりました。
 ヨナグニウマ、トカラ馬、ミサキ馬とその子供たちという個性豊かな馬たちが、遊休地などを利用して放牧でのびのびと暮らしています。
 観光のお客様と自然の中をお散歩したり、保育園や学童の子ども達と遊んだり。また、小学校の授業やクラブ活動で子供たちが馬と共に過ごす活動をしています。

- 6 -



なびい
 Nabie

所属：沖縄こどもの国 Okinawa Zoo & Museum
 性別：牝馬 Mare

どうなん
 Dunan

所属：沖縄こどもの国 Okinawa Zoo & Museum
 性別：セン馬 Gelding

なぐに
 Naguni

所属：沖縄こどもの国 Okinawa Zoo & Museum
 性別：セン馬 Gelding

沖縄こどもの国
 Okinawa Zoo & Museum

与那国馬や馬ヤザ、馬ウマー（豚）やチャーン（鶏）など、沖縄の在来畜物の保存と、それに関する教育普及活動に力を入れています。沖縄こどもの国の在来畜物には、主に「琉球列ワールド」で会うことができます。また、「ふるさと園」では、家族がいた昔の沖縄の家の風景を垣間見ることができます。
 沖縄こどもの国では、沖縄在来馬である与那国馬4頭を含めて8頭の馬が飼育されています。

- 7 -

しゅってん しやうかい
出展ブースの紹介

かく
各ブースの営業時間 11:00~16:00
各出展ブースの会場内での配置は、本冊子の裏表紙(12ページ)でご確認ください。

いんしよく
飲食

② 月桃チマキRUUCHOO
ルーチュー
素材にこだわりの月桃チマキを販売します。
月桃紅豚チマキと月桃豆チマキ (VEGAN) を
ご用意予定です。

⑤ marph kitchen
マープキッチン
ベークグルサンド、焼き菓子(スコーンなど)、
オリジナルドリンクの販売をします。

⑦ 雨の日ライオン
あめ
菓子の販売です。

⑧ MILL By TIMELESS
ミル バイ タイムレス
パンの販売をします。

⑫ MILK BOMB
ミルク ボム
キッチンカーでのタピオカドリンク、
ポップコーン販売をします。

⑩ 1756's café
イナコロウス カフェ
マカロン、焼き菓子など
テイクアウトの
お菓子を販売します。

ワークショップ

① 沖縄県立博物館・美術館
おきなわ県立博物館 びじゅつかん
おきみゆーの体験キットであるぼう!

② ?Harucuru?
ハルクル
草履みワークショップ
-ピークたわし-

⑥ 沖縄市郷土博物館
おきなわし まようど はくぶつかん
馬具のハンズオン展示

③ ヨナグニウマ保護活用協会
よなぐにうま ほご かつようきようかい
活用協会に所属する牧場の紹介と、
ヨナグニウマのオリジナルグッズ販売をします。

④ somekoubou haruiro
ソメコウボウ ハルイロ
紅型コースター体験
(うさぎ・うま・ぞう)

⑨ まえだ工房
こまほろ
消しゴムはんこ雑貨
消しゴムはんこ
ワークショップ

⑪ SEED OKINAWA
シード オキナワ
沖縄生き押花/バッチづくり

⑬ 乗馬・エサあげ体験コーナー
じやうば ないげん
乗馬体験 Pony Ride ¥500
エサあげ体験 Hand Feeding ¥200



- 12 -



Okinawa Zoo and Museum Foundation
 公益財団法人 沖縄こどもの国
 TEL:098-933-4190 FAX:098-932-1634
 〒904-0021 沖縄県沖縄市胡屋5-7-1

公式 YouTube で
 沖縄こどもの国情報配信中!

沖縄こどもの国を応援する!
 オンラインサポーター「ゆんたくコミュニティ」も実施中!

沖縄版第322号・沖縄版第322号・沖縄版第322号・沖縄版第322号

令和4年度琉球競馬ンマハラシー実施報告書

令和5年3月

編集・発行：公益財団法人沖縄こどもの国

住所：沖縄県沖縄市胡屋5-7-1

